
幽霊案内人 円屋壮太

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊案内人 円屋壮太

【Nコード】

N1855G

【作者名】

c o c c o n e k o

【あらすじ】

呉服屋円屋の長男、壮太は絵を描くのが趣味で、いつでも犬の灯子を恋人のように連れ歩く変わり者。ところが、彼の絵には秘密があつて？

枝垂桜の絵（前書き）

今度は日本が舞台です。実はもう書き上げである小説です（笑）少しでも楽しんで頂けたら嬉しいです。

枝垂桜の絵

大きな枝垂桜が、柔らかな風に、しなやかな枝を揺らしている。残念ながら、今は枝に花は無い。

ようやく冬の厳しさも消え、雪も町の界限から消え去り、日差しが春めいて来たばかりだ。暖かな日差しに、枝垂桜の根元に、露の臺が、丸くてぽってりとした、かわいらしい芽を出していた。

その桜を尻目に、すぐ横にある通りの上を、人々は関心が無さそうに往来する。

その中に一人。一際小さな人影がある。

小さいのも道理で、まだ子供だ。

一丁前にざんばらにした髪は短く、店の名前が染め抜かれた前掛けをして、きっちりと着物は着崩れさせてもいないのは、髪型のわりに、几帳面な性格なのだろう。

名を文吉といった。

奉公先の使いを済ませ、川べりの帰り道を、何とはなしに急いでいる所だったのだが、ふと、これも何とはなしに見やった先で、見知った姿を見つけた。

川の畔に一本、うっすらと色付いた蕾を付けた、大きな枝垂桜の傍で、足元に白い犬を一頭侍らせて画板を持ち出し、何やら描いている人物。

こちらを見てはいないし、気が付いてもいない様子だ。

短めの髪は後ろの高いところで一括りにし、飄々とした風情は今日も変わらない。

あまり顔を合わせたくはないのだが、あれでも一応自分の主人にあたるお人だ。無視するわけにもいかず、文吉は声をかけた。

「何をしていらっしゃるんです？」

「うん。お仕事」

こちらを、相も変わらず見ようとしなくせに、文吉に気が付

いていたかのように答えを返す。

ふん、と、勢いの良い溜息を吐き出して、文句の一つも言っ
てやろうかと、街道を外れて傍まで近づいた。

「壮太様は、また店をおサボりで？」

桜の下で、のほほんと絵を描くのが仕事なら、世の中の画家は浮
かばれまい。

「サボりとは酷いなあ」

ようやくこちらを見たこの男は、文吉の雇い主である呉服屋の長
男坊だ。

文吉は、どうもこの人物が好きにはなれないのだが、何故かこの
男、女性にはモテた。

店は次男の次郎太が継ぐことになっていたが、なんにせよ、めっ
たに店に顔を出さない壮太が店先に出るだけで、女性客が溢れかえ
る。

つくづく、世の女性達は男を見る目がないものだ、と、文吉は思う。
こないないかげんで風来坊で、何を考えているのかまったく分か
らない男より、次郎太の方が、よほど頑張り屋でしっかりしていて
頼りがいがあるのに。

「何を描いているんです？」

壮太の趣味は絵を描くことだったが、別段画家になりたいわけ
でもないらしい。それでも、こうして絵を描く姿を見かけることはし
よっちゅうだった。

文吉は、壮太は苦手だが、壮太の描く絵は好きだった。

まだ小さくて背が届かないので、背伸びをして画板を覗き込む。
すると。

「おや。見てはいけないよ」

ひよい、と、画板を退けられてしまった。

「何故ですか？」

ムツとして、文吉は壮太を睨んでみる。

さらにつま先まで伸ばして、精一杯身長を伸ばせば、ちらりとだ

が、目の前の枝垂桜の下で、川面を見つめているのか、風景の中に佇む女の絵を見ることができた。

「だめだよ、文吉」

笑いながら、また、ひょいと画板を退けられてしまったので、描かれた女の顔までは見ることが出来なかったのだが、意地悪をする自分の主に、つつい、ムツとしてしまった。

「なんでですか？美人さんじゃないですか」

ムツとしたついでに、つい、口をついて嘘が出た。

実際、枝垂れ桜の下には誰もいないのだが、女タラシの壮太のとだ。きつと綺麗なモデルでもいるのだろう。

壮太はきよとん、とした後、急に、やれやれ、仕方がない、といった風情で、文吉を見下ろした。

「見てしまったのかい？」

「ちょっとですけど。隠すことはないじゃないですか」

「あまりこの女を褒めると、呪われてしまうよ？」

にっこりと、微笑みながら言われるのが、また悔しい。

「また、俺をからかって」

頬をぷつくりと膨らませれば、先ほどから壮太の足元で丸くなっていた犬の灯子が、するりと擦り寄ってくる。

「からかってなんかいないよ。お前はもう少し人を信用したらどうなんだい？」

灯子の頭をなでてやりながら、文吉はさらに頬を膨らませた。

「呪われるなんて言われて、信用なんか出来ません。もう、いいです。俺、帰ります」

くるりと踵を返せば、壮太がぼりぼりと頭を掻いた。

「ああ、使いの途中だったのか。引き止めて悪かったね」

文吉が勝手に足を止めたのだから、気にしなければいいのに、こうして謝ってくるのは、人が良いのか悪いのか。

文吉は、見えないように溜め息をつきつつ、もう構わず店に向かって歩き出した。

くうん

灯子が一声鳴いた。

「どうしたんたい？」

壮太は、しゃがんで頭を撫でてやる。

黒い瞳を潤ませて、灯子が心配そうに、文吉の小さくなってゆく背中を見つめている。

「うん、困ったねえ」

灯子の頭を撫でながら壮太はしゃがみこみ、自分の描いた絵を見やった。

「憑いて行ってしまったようだねえ」

壮太の画板の上には、川野辺に立つ枝垂桜が一本だけ、物足りなさそうに描かれた和紙が一枚、文鎮で止められていた。

ふうっと、軽く風が吹く。

すると、背中に何かが擦り寄って、壮太は立ち上がった。

「やれやれ、どうしようか？」

背中に向かって話しかければ、少女らしい、甲高くてころころとした声が発せられる。

「今の、今回の？」

「そう。艶子に教えた娘なんだけれど。困ったねえ」

あんまり、困ったようには見えない顔で、それでも腕組みなぞしてみる壮太に、おかつぱ頭の少女が寄りかかって、一緒になって文吉の歩いて行った道を見やった。

艶のある黒髪に、大きな黒目、黒いワンピースに黒い靴下、黒い靴。全身黒尽くめの少女は、ひょいと壮太の画板を覗き込んだ。

文吉よりは身長があるので、彼女は容易に、壮太の絵を見ることができた。

「あらあ。綺麗に抜けちゃって」

文吉が見たはずの、枝垂桜の下に立っていた女の姿は消えてしまつて、その部分だけが切り取られたかのように真っ白だった。

「憑いて行っちゃったんじゃ仕方ないわね。まるっと貰い受けに行

くかしら」

「それって？」

「警告したのに、憑いていかれる様な事をした方が悪いわ」

「うーん。あの子、うちの店子なんだよなあ」

「取っちゃまずいの？」

「艶子。君は時々発言が過激すぎやしないかい。閻魔様に叱られてしまうよ？」

二人の会話は、他人が聞いたら何の話をしているのかさっぱりだったが、どうやら二人の間では成り立っているようで、おしゃべりをしながら灯子を連れて、のんびりと歩き出した。

「文吉、只今戻りましたあ！」

声を張り上げれば、土間から女中のおみよが顔を出して、手招きする。

使用人用の玄関から土間へは引き戸で繋がっていて、土間は台所に繋がっている。大勢の飯炊きをする場合は、土間も台所になる。

使用人は、みなこの土間の、大きな食卓で飯を食う。

この店の奥方である彰子が、便利だから、の一言で、旦那様の彦江門を黙らせて、食卓を入れてしまった。

実のところ、呉服問屋円屋は、彰子が仕切っているといっても過言ではない。

「お疲れ様。腹が減っただろ」

見れば食器は片付けられて、他の使用人達は朝飯を済ませてしまったようだった。

「ちょっと待ってておくれね」

いそいそと、台所へ消えるおみよの背中を眺めて、文吉は食卓に着いた。

いつもは賑やかなのに、一人で居ると、なんだか食卓が普段の倍は大きく見える。

目端に、女物の着物が見えた気がして、ふと見やれば、壮太がい

た。

女物の着物が見えた気がしたのは気のせいか。

壮太は変らず、灯子を足元に侍らせている。

それよりも、自分より後から来た筈なのに、何故既に此処に居るのだろうか。

そちらの疑問が先立ってしまつて、文吉は先程見えた女物の着物が、壮太の描いた女と同じ臙脂色の着物だったことに気付かなかった
「奥様が皆にね」

着物の上から襷を掛けたおみよが、いそいそと持ってきたのは、
餡子の代わりに魚のすり身と細かく切り刻んだ野菜を混ぜた肉団子の入った餅だった。

「あと、ちゃんとご飯もあるからね」

そう言つて、またいそいそと台所に消えた。

おみよは気立ても良くて、美人とはいかないが、愛嬌のあるかわいらしい顔をしている。働き者で、皆に好かれていた。文吉も、姉のように慕っている。

「おや、美味そうだね」

壮太が餅を覗き込んでくるので、文吉は慌てて口に入れた。

「駄目ですよ、壮太様。女将さんに言い付けますよ」

ひよい、と顔を出したのはおみよだ。手には焼き魚と味噌汁に粟飯の椀を乗せた盆を持っている。

「はい、文吉。お待たせ。お腹が空いただろ？」

言いながら、その盆を、文吉の目の前に置いた。

「朝から豪勢だね」

餅が出た時点で豪勢なのに、ちゃんと味噌汁と飯が出る。

「女将さんが、昨日試作で作ってみたんだって。で、せっかくだからって、皆にくれたんだ」

てきぱきと動きながら、おみよがいつもと違った朝食の説明をする。

「お袋さまが？」

不思議そうな、壮太の声。

「そうですよ。女将さんが作ったんです」

「僕、貰ってないんだけどなあ」

食べたそうに、文吉の餅を見つめる壮太に、おみよはくすくすと笑った。

「壮太様が悪いんですよ？女将さんに何にも言わないで、灯子と出掛けるから」

「じゃあ、僕の分は朝飯もなさそうだなあ」

にっこりと微笑む壮太に、文吉は呆れた。

おみよが、壮太の朝食を、残しておかないわけがないのに。そもそも、女将さんだって、何だかんだと文句を言いはすれど、この厄介な長男坊を可愛がっている。

「次郎太様が不憫だ」

そんなことを思ってしまう文吉だったが、女将が壮太ばかりを鼻屑するかといえば、そうではない。

しっかり者というよりは、剛の者という言葉がしっくりする女傑である。本人の前で、可愛がるような素振りは一切見せず、ビシバシと、当の次郎太を引き合いに出して辛辣な言葉を浴びせることのほうが多い。

文吉が次郎太を哀れむのはお門違いなのだが、壮太を嫌っている分、文吉はどうしても偏った考え方をしてしまうらしかった。

「あれ？」

目端に、また、女の着物が見えた気がした。

「おかしいな？」

眼を擦って、見えたと思った方角を見ると、今度はそこに黒猫がいた。

長い尻尾をぴんぴんと跳ねさせて、音もなくスイスイと歩く、小さめの綺麗な黒猫は、そのまま灯子を他所に、つい、と、壮太の足元に擦り寄った。

「おや、艶子も来たのかい？」

壮太が言えば、
なう

と答える。

灯子が小さく、
くうん

と鳴いた。

「どれ。艶子がいるなら、灯子が怖がってしまうからね。僕は退散するとうるか」

壮太がそう言って、土間から上がろうとすれば、艶子と呼ばれた黒猫は、その壮太の足を、かぷりと齧った。

「あいたたっ。痛いよ、艶子」

「うわん！」

壮太が飛び跳ねれば、灯子が艶子に向かって吠え、艶子は毛を逆立てるでもなく壮太の足を離れた。

見れば、壮太の足首には、しっかりと歯形がついてしまっていたが、文吉は呆れて見るだけで、おみよが慌てて塗れた手拭いを壮太の足にあてた。

「ありがとう、おみよ。僕はいいから、文吉の世話をしておいで」
おみよから手拭いを受け取ると、心配そうに擦り寄る灯子の頭と、パタパタと尻尾を不機嫌そうに振る艶子の頭とを、交互に撫でた。

「壮太様の分も、ご飯ありますからね」

おみよが、子供を叱り付けるように言いながら、自分の腰に手を当てる。

「ああ、分かっているよ。ここで食べさせてもらうつもりだったのだけ」

壮太は、まだ痛むらしい足をひよこひよこ引きずりながら、土間から上がるのをやめ、母屋から出て自室のある離れへ向かう。

「あとで、部屋に持って来て貰っても良いかな？」

途中で振り向いて、見送るおみよに聞けば、おみよは笑いながら頷いた。

足元にまとわり着く灯子に躓きそうになる壮太が、可笑しかったらしい。

「おや、お前さんは残ったのかい？」

おみよが語りかける先を見れば、黒猫が、まだその場に鎮座していた。

みゃあうう

おみよに頭を撫でられて、気持ちよさそうだ。

「おまえさんにも、何かあげられるかな」

楽しそうに台所へ向かうおみよが消えると、黒猫は文吉の傍まで歩いて来た。

「お前、艶子といったか。壮太さまのところには行かないのか？」

文吉の足元に座り込み、じっとこちらを凝視する黒猫に、文吉は何だか薄ら気持ち悪くなる。

魚のおこぼれが欲しいのかと、切れ端を与えてみるが、見向きもしない。

「なんだ、こいつ」

ぼそりと呟き、魚の最後の一切れを口に放り込み、女将特性の餅をほおばった。

「ごちそうさま！」

勢い良く立ち上がり、小さな体で食器を片付けると、もう、黒猫の存在は忘れてしまったように、パタパタと店の方へと走っていった。

「慌てると転ぶよ！」

壮太用の朝飯を、盆の上に乗せたおみよの声を背中に受けつつ、手を振って持ち場に戻って行く。

その後姿を、猫の艶子がじっと見つめていた。

黒猫と死神

ほとほと、戸をたたく音がする。

障子戸を開けてやれば、黒猫が器用に尾っぽを振って、戸を叩いていた。

「艶子。用事は済んだのかい？」

気前良く部屋の中に黒猫を招き入れて、壮太はまた障子を閉めた。母屋から裏庭に面したこの小さな離れ屋は、壮太の部屋になっている。住人は、壮太と灯子のみである。元々、円家の茶室であったのを、先代が新しい茶室を建てた為に放置されていた。それを、どうせ使わないならと、壮太が自分で掃除をして自室にしてしまったのだ。

主人も女将も、取り壊してしまうのももったいないから、自分で管理するならと、この茶室は壮太専用になっている。

他にも、母屋に住んでいた頃は、壮太の部屋の周辺は、廊下から何から彼の絵や絵の道具やらで散らかって、收拾がつかなかったという理由もあった。

「相変わらず凄い部屋ね」

少女の声が、どこからともなく聞こえた。

「そりゃ、僕の部屋だからね」

壮太は、どこにも姿の見えない少女の声に、慣れた風に答える。

言葉通り、壮太の茶室は、母屋に住んでいた頃と変わらず、絵の道具と自作の絵で溢れている。それでも、母屋の頃よりはきちんと整理されるようにはなっていた。

「壮太様？居ます？」

また、少女の声。先ほどとは違い、今度はおみよの声だ。

「うん、居るよ」

壮太が答えれば、すい、と、戸が開いて、盆を持ったおみよが入って来る。

ここは茶室なので、入り口が低い。なので、正式な入り口を使って出入りするのには猫の艶子くらいで、皆庭に面した大きな縁側から障子を開けて入ってくる。おみよも例外ではなかった。

「壮太様、戸くらい開けてくださいよ。両手塞がってるんですから」「おみよなら、器用だから大丈夫だろう？」

「そんなんだから、壮太様は文吉に嫌われるんですよ？」

ぷん、と、頬を膨らませて、おみよが持って来た盆を、室内ではなく縁側にわざと置く。

「おや？」

そのまま室内の文机に座ろうとしていた壮太は、振り返って様子を伺った。

「意地悪には意地悪でお返しです」

べっと、舌を出して足早に帰ろうとするおみよに、壮太はくすりと笑った。

「ごめんよ、おみよ」

「知りませーん」

振り返らずに、さっさとおみよは見えなくなってしまった。

「怒らせちゃった」

「だいたい、冷たいのよ壮太は」

また、少女の声。おみよではないその声は、壮太の背後から。

「そうかな？」

「あたしに優しいのは当然だけど。女の子には気を使ってあげなさいよ」

ちらりと、壮太が振り向いた視線の先には、猫の艶子。

「僕は気を使っているつもりだけど？」

「あら、そう」

「だって。あのぷっくりとした顔、可愛いと思わなかった？」

「・・・・・・性質が悪いわ」

壮太の目の前で、猫の艶子はしゅるりと体を伸ばした。

伸ばした腕は白く細い人の腕に。長い尻尾はスカートの中に隠さ

れ。目の前に現れたのは、枝垂桜の川縁で、壮太と共にいた、おかっぱ頭に黒いワンピースの少女。

「おみよが帰ってくれないと、艶子がお喋りできないだろう？」

見慣れた風景なのか、壮太は驚きもしない。

「へえ？だからって怒らせる必要はないと思うわ」

ぱさりと、髪をかきあげる仕草は、年齢よりも、その名の通り艶やかだ。

「大丈夫、おみよは優しいし可愛いから」

「……あんだ、そんなだから文吉に嫌われるのよ」

平然と、誰だって赤面してしまいそうな言葉を吐くのは、この男の悪い癖だ。

「だって、本当のことなのに。艶子は美人さんで可愛いよ」

当の本人を目の前に、悪びれも無い。

「死神捕まえてそんなことを言う人間は壮太くらいよ」

「死神だって人間だって、美人で可愛いというのは本当だからね」

そこまで断言されれば、自分を死神だと言った少女は、流石に頬を赤らめた。

「ほら、可愛い」

にっこりと、微笑まれば、ある種の諦めの溜息しか出てこなかった。

死神。

それは人であれば誰でも怖れを抱く存在だ。それを捕まえて、美人だの可愛いだのと言っている壮太は、肝が据わっているのか、それともただの阿呆なのか。

何にしろ、猫にも人にもなれるこの少女を相手に、普通に接していられるのだから、変わり者には違いがない。

「で、どうだったのかな？」

壮太が、艶子を縁側から室内に招き入れ、ついでに朝食を抱えて

部屋の真ん中に置く。

温かい味噌汁から湯気が立ち上った。

「やっぱり憑いていたわ。まったく、壮太がいながら、どうしてこんなことになっちゃったのかしら。面倒なことこの上ないわ」

「仕様がいないじゃない。僕の絵を見て、文吉が美人だって言っちゃったんだもの」

「ずず、と、味噌汁をすすって、朝飯を旨そうにぱくつく壮太の脇に、灯子が寄り添う。」

「灯子に心配を掛けている様ね」

「灯子は僕の彼女なもの」

飯を食らう壮太の正面に正座して、艶子は壮太の画板を取り上げる。

画板に挟まれたままの絵を目の前に掲げてみれば、川辺に立つ枝垂桜の下に、ぽっかりと人の形に抜けた白い部分が浮いている。

「もったいないわね」

眉間に皺を寄せる艶子に、壮太が食べ物を飲み込んで首を傾げた。

「何が？」

「あんたの絵よ」

ぽっかりと白いそこには、ちゃんと人物が描かれていたはずだ。

臍脂の着物に玉簪の、少し背の低い。

「だって、抜け出ちゃったのだから」

「それで今、文吉と一緒になのよね」

壮太は常人には見えないものを見る目を持っている。それをこうして絵に写してしまうのだが、この絵も不思議な力を持っていた。

「幽霊を写し取って、絵にしてみえるのに、肝心の絵が完成する前に、絵に写した場所から幽霊がいなくなってしまうえば、写し取った幽霊も消えてしまうのは、便利なのか不便なのか分からないわね」

艶子が画板を床の上に放り投げて、壮太を見やる。

壮太は口に入れた肉の入った餅を飲み込んで、最後に茶をすすった。

「ま、全部写し取って、絵にしてみました、霊は束縛されてしまつて、艶子の良い餌食になってしまふからね」

とん、と、茶碗を盆の中において、ご馳走様、と言って、誰にともなく頭を下げた。

「餌食って、人の悪い。私は仕事をしているだけよ」

つん、と、艶子が睨む。

「死者の魂を冥土に送る仕事っていうのも、大変だろうに」

「だって、私は死神だもの。死神がいなくなったら、この世は幽霊で溢れ返るわよ」

「ああ、それはいただけないね」

本当にそう思っているのか、ぞんざいに食器を盆の上で片付けながら、壮太はのほほんと答えた。

ぷう、と、艶子の頬が、風船みたいに膨らむので、つい、壮太は笑い出す。

「艶子は猫でいるより、人の形を取っていたほうが可愛いよ」

笑いながら、そんなことを言う。

「死神に向かって可愛いなんて言う人間は、お前くらいのものよ」
先程と同じ言葉を繰り返して、呆れてため息をつきながら、艶子は自分が放り投げた画板を、もう一度手に取った。

壮太の部屋には、この画板に挟まれた絵のように、一部分がくり貫かれたみたいに白い絵が沢山ある。

もちろん、ちゃんと完成している絵もあるが、何せ描かれているのは幽霊だ。人にあげるにも、展示するにも縁起が悪くてどうしようもない。

時たま、遺族に会えば、渡してやるくらいのものだろうか。

そういったわけで、壮太は画家になる気はまったくくないらしい。

「あんたも、幽霊以外の絵を描けば、売れるかもしれないのに。物好きよね」

「幽霊を描くのは、奥が深くて良いのだよ」

「そういうものかしら」

にこにこと、暢気風に笑っている男を目の前に、死神の少女は眉間に皺を寄せた。

「まあ、私はあんたのおかげで仕事が捗るから、文句は言いませんけどね」

「そう？」

「そりゃあね。普通なら死者を探してうろろしなきゃいけなかったのを、あんたが見つけて絵に写してくれるから、捕まえやすいもの」

壮太が見つけた幽霊を絵に写して束縛し、死神の艶子がそれを狩って冥途まで連れて行く。

二人はそんな間柄だった。

まあ、今回のように、絵が描き終わる前に対象である幽霊が誰かに取り付いたりしてしまえば、こうして逃がしてしまう事になるので、不便といえば不便でもあった。

「でも、今は面倒なことになったわ。どうしようかしら」

艶子は腕組みをして、首を捻る。

くうん、と、灯子が鳴いて、壮太に鼻面を押し付けた。

「灯子が手伝ってくれるって」

その灯子の頭を撫でながら、壮太が艶子に向かって笑って見せたが、艶子の眉間には皺が寄った。

「犬は確かに魔除けになるけどね。どうやって灯子に手伝わせるの。大体灯子は壮太から離れないでしょう」

「うん、そうだな」

壮太も首を捻って、思案気な顔をした。

「文吉に憑いている幽霊に、灯子が突っ込んでいくのはどうだろう？」

真面目な顔で何を言い出すのか。

艶子は盛大に、肺中の空気を使って、全身から溜息を吐き出した。

「灯子と文吉が可哀想でしょう」

「でも、驚いて文吉から彼女が離れてくれるかもしれないよ？」

「そうかもしれないけど」

艶子は灯子を見やった。

白くて、耳だけ茶色い、雑種犬の灯子は片時も壮太から離れない。壮太の言うとおりで、まるで恋人だ。

中型で、大きくくりくりとした眼は、犬特有のつややかさで潤み、なんとも賢そうで、実際賢い。

「ねえ、灯子。あんたなんでこんなの傍が良いの？」

艶子が言えば、灯子は抗議するようにワン、と吠えた。

「人型なら、さぞかし美人だと思うのよ」

「灯子は美人だよ」

「はいはい」

灯子の頭を撫でながら、壮太は真面目な顔で言う。

「貴方達が相思相愛なのは解ったから。それより、文吉のほうの問題でしょう？」

「あはは。文吉はお人好しだからね」

世間話みたいに緊迫感の無い壮太の話し方に、艶子は眉間に皺を寄せる。

壮太に会えば、艶子は皺を寄せてばかりで、そのうち元に戻らなくなりそうだ。

「そもそも、何で文吉に憑いちゃったのよ」

問題はそこだ。

枝垂桜の下にいた女の幽霊が、どうしてあんな小さな子供に憑いてしまったのか。

「だから、文吉はお人好しだから」

「……言っている意味が解らないから、もうちょっと詳しく説明してもらえるかしら？」

要領を得ない答えをされて、艶子はふう、と、息を軽く吐く。

人間の癖にこの男は、死神相手に、にこにこことばかり、笑っている。閻魔様の前でも、同じ調子なのだろうという確信が持てる。

「僕の絵を、文吉が見てしまってたね」

「ふうん？」

「何て言うのか。多分ちゃんとは見ていなかったと思うのだけど、
どういうわけか文吉の奴、綺麗な女性だ、って言ってしまったてねえ」
壮太は、顎をさすりながら先ほどの川縁での、文吉とのやり取り
を思い出す。

「僕が描いていたのは、彼女の後姿なのだから、顔なんか分かる筈
もなかったのだけど」

実際、文吉とて当てずっぽうで言ったただけのことだったのだが、
此れがまずかった。

「彼女は文吉の一言に、随分と嬉しそうだったよ」
艶子はその場にばかりと倒れた。

「……力が抜けたわ」

「おや。じゃあ、新しいお茶を持って来ようか？」
「是非そうして頂戴」

黒い瞳をきろりと動かし、壮太をねめつける。

壮太は、おみよが持って来た盆に食器を乗せて立ち上がると、灯
子を伴って、母屋の方へと出て行った。

今回の標的は、入水自殺したお静という木綿問屋の女中なのだが、
此れが憐れな死に方だった。

もともと働き者ではあったが器量がよろしくない女で、醜女とま
ではいけないが、まあ、おおよそ自分の顔に自信が持てるものでは
なかった。

本人もそれをちゃんと自覚していて、せめて身なりだけはと、常
に小綺麗に化粧をし、着物もきちんとして、つつましながらも努力
をしていた。

そんなお静に、店の旦那が結婚話を持ちかけた。

元々良く働いて気も利くし、美人ではないが良く出来た娘だった
ので、相手先の店の、頃合の良い若衆と娶わせようとしたのだった。
しかし、相手が悪かった。

見合いをするというので、相手の店の主人が、こっそりお静を見

に來た事があつた。それで、木綿問屋の主は何の氣もなく、お静をそのまま紹介したのだが、相手はお静を見るなり怒り出した。

「そちらが良い娘がいるというので、こちらはうちで一番の若者を出すつもりでいたのに、あの醜女とは何事か！」

その怒鳴り声が、お静に聞こえてしまった。

自分の事だと悟つたお静は、そのまま泣きながら店を飛び出し、翌日。

あの、枝垂桜の下で、水死体となって発見された。

木綿問屋は大いに怒り、相手の店をとことん追い詰めて破産までさせたらしいが、お静は浮かばれずに幽霊となつてしまった。

「事の顛末はそういう事だから、美人と言われて、本当に嬉しかったんでしょね」

「相手の店は潰れて、木綿問屋は命日には必ずあの枝垂桜の下に、供え物を持って来るらしいのだけれど。氣にしていた分、彼女は余程傷ついたのでしょね」

からり、と、自分で閉めて出た障子を、今度は開けて、左手に湯飲みと急須の乗った、先程と同じ盆を持って、壮太が帰つて來た。縁側にはやかんが置いてある。障子を開けるために、一度置いたのだろう。

下駄を脱いで上がると、やかんも持つて部屋の中に入る。
もちろん、傍には灯子。

表の商売 裏のお仕事

「早かったじゃない」

「お湯が沸いていたからね」

起き上がった艶子の向かいに座って、急須にやかんを傾ければ、熱そうな湯気が立ち上る。

「玉露じゃないの？」

「僕はほうじ茶のほうが好きだからね」

「どっちでもいいけど」

そこで、二つの湯飲みにほうじ茶を注ぎながら、壮太は艶子の顔を見やった。

「ああ、艶子は猫舌だっけ？」

黒猫に変化するのだから、熱い飲み物は苦手だろう。

「ちゃんと手元を見て頂戴。零れるわ」

ぴしゃりと叱られた。

「玉露だったら、少し冷ますから、丁度良いのよ」

「やっぱり猫舌なんだ」

くすりと、小さく笑う壮太に、すい、と目を細めて、艶子は答える。

「何か可笑しいかしら？」

ひやりとした空気に、壮太は慌てて湯呑みを艶子の目の前に差し出した。

「それで、文吉なんだけど」

「自分が取り憑かれているって気が付いているのかしら」

「うん、それはまだじゃないかな。ついさっきの事だし」

ずず、と、湯呑みを傾けて、壮太は開け放した障子の向こうに見える母屋を見やった。

「今のところは平穏だけど」

「お静自体、人に恨みを持つような娘ではないから、騒ぎは起こさ

ないんじゃないかな」

また、ずず、と一口、茶を啜る。

「あら、知っているの？」

「そりゃあ、うちは呉服問屋だから、木綿問屋とは懇意にさせて頂いているしね」

それはそうだが、店先に滅多に姿を現さない壮太が、商売先の木綿問屋と懇意にしているなどとは思っても付かなかった。

「壮太もたまにはまともに仕事しているのね」

「絵描きだって、僕のお仕事なんだけどなあ」

「人間のお仕事よ。あんたのそこ、長男坊がさぼり過ぎるから、次男坊が店を継ぐのでしょ？」

頬杖をつき、ようやく頃合になったほうじ茶に口を付ける。

「はは。痛い所を突くね」

ちつとも痛いとも思っていない顔で笑うのが憎たらしい。

「とても性格の良い娘だったみたいね」

「うん。だから、今回の事は可哀想でね」

ああ、だからか、と、艶子と思う。

普段、幽霊を描く時は、その人物の顔も着物も、きちんと描く壮太が、お静だけは後ろ姿だった。

彼女の死因にもなった彼女の顔を、描くのは忍びなかったのだろう。彼女は死んでしまった今でも、自分の顔で悲しんでいる。

「女の子の顔を醜いなんて言う男って、最低よ」

「まだまだ、世の中男女平等というわけにはいかないからねえ」

女性が選挙権を得たのはつい最近だ。この国はまだまだ、欧羅巴諸国に追いつくには程遠い。

「まあ、仕方ないわ。こうなった以上、取り憑いたお静を文吉から引き剥がさない限り、うっかり文吉の魂まで、斬ってしまいかねないから」

「君の刀でどうにかならないの？」

「あんたね。あたしが刀を振り上げて、文吉は大人しくしてくれる

？」

「……寝込みを襲うとか」

「嫌あよ、そんな馬鹿な事」

しゅるりと、艶子は黒猫に姿を変える。

「取り敢えずは、何か方法が見つかるまでは様子見ね。ホント、いっそ悪霊にでもなってくれたら、無理にでも引っぺがしてしまえるのに」

「だから、艶子は発言が時々過激だよ？」

つい、と、自分の脇をすり抜けて、外へ向かう艶子の尻尾を掴む。
がり

思いつきり爪で手の甲を引っかけば、慌てて手を離した。

血が滲んでいたが、自業自得というものだ。

「今度やったら噛み付くからね？」

黒い瞳に睨まれて、亀みたいに壮太は首を窄めた。

「しばらく、文吉から目を離さないようにするから、壮太は潰れた店について調べて頂戴」

「今更調べた所で、どうにもならないと思うけどな」

「あとは、木綿問屋ね。旦那に会ってお静について聞いて頂戴」

嫌々そうな壮太の発言は一切無視をして、艶子は壮太の離れを後にした。

この際、お静の自殺の原因となった見合い先の旦那に、頭を下げるなり、お静の気の済むようにしてやりたかった。

問題は、彼女が自分の顔について、どうしたら納得してくれるからだ。

「多分、原因を取り除きさえすれば、お静は文吉から離れてくれるんだろうけれど」

一度人に取り憑いた霊を、成仏させてやるのは色々と面倒くさい。一人でふらふらしていてくれれば、無理にでも狩って冥途へ連れて行けるのに。

「下手をすると、取り憑かれた人間の魂まで一緒に狩っちゃうのよ

ね」

それに、言われるほど醜い容貌でもなかったというのに、女性に對して酷い言い様ではないか。

お静を哀れにも思うし、同じ女として暴言を吐いた本人を許せなかった。

たとい店を潰されたにしても、同情心すら沸かない。主がそういう人間なら、下の人間はたいそう苦勞していただろう。

壮太の店とはとても違う。

円屋は、それはもう主夫婦がしっかりしているものだから、下の人間は活き活きと働いている。

旦那の彦江門は商売の引き際も攻め際も心得ていて、女将の彰子は使用人の扱いが巧かった。

店の下男下女の、親役をしっかりと務めている。

ゆえに、使用人の信賴も厚く、取引先からも、商売を見極めるなら円屋を習え、とまで言われるほどに信用されていた。

私利私欲に走ることなく、商売の本質を貫く姿勢は、次期当主の次郎太にも引き継がれている。

店は客のため、使用人のためにある。

その思想が変わらない限り、円屋は繁盛するだろう。

そんな家に生まれながら、壮太は何故あかも飄々としているのか。「不思議だわ」

それでも次郎太なども、兄さん、兄さんと言って、慕っているの
で謎は深まるばかりだ。

ふう、と、艶子はひとつ、ため息をつく。

自分だって、いくらあの男の能力が便利だとはいえ、何だかんだと壮太を相手にしているのだから、人の事を言えたものではないのだ。

店から威勢の良い声が聞こえる。

開店して、いよいよ忙しくなって来たらしい。

艶子は勢いをつけて走り出し、母屋へと向かった。

くうん

艶子の去った、母屋の方角に向かって灯子が心配そうに咽喉を鳴らした。

「何、心配することは無いよ」

縁側に腰を下ろし、隣に座る灯子の頭を撫でながら、壮太も母屋を見やった。

「ああ見えて、艶子は優しいからね」
くうん？

首を傾げる灯子に、壮太は笑った。

「灯子は心配性だねえ」

そう言う壮太本人は、文吉に取り憑いたお静をどうするつもりなのか。

艶子と灯子の心配を他所に、まるで人事のような壮太である。

「さつて、と。そろそろ行きましようかねえ？ 灯子」

大きな伸びをひとつすると、盆に茶の道具を乗せ、空になったやかんを持ち、ゆっくりと母屋へと向かった。

「兄さん！ 何？ 手伝ってくれるの？」

珍しく店先に顔を出した壮太を、次郎太が見つけて手を振った。

「たまには、長男らしいことをしないとね」

にっこりと笑い返す壮太の頭を、衝撃が走る。

「い、痛い」

「当たり前だ！」

振り向けば、拳を握り込んだ美女。

兄弟の母であり、この円屋の女将である彰子が、艶やかな唇を歪ませ、こめかみに血管を浮き上がらせて立っていた。

「なあにが、長男らしいだ。だったら毎日店に顔を出しな！」

纏めて結い上げた髪は、年の割りに白髪もなく黒々と滑らかで、東京でも評判の美女である。老若男女問わず、ファンは多い。

「ほっほ。さっそく殴られたか。灯子はどうした？」

騒ぎに番台の奥から、この店の主が顔を出す。

ころんとした体形だが、けして背が低いわけではない。柔和な顔は、円屋の次男坊に引き継がれている。

仏の彦江門と呼ばれているが、商売では絶対に妥協しない。一部では、仏の面を外せば般若の円屋、とも呼ばれている。

「お父さん。お早うございます」

「おう、お早う」

母に殴られた頭をさする壮太を、幾人かの使用人がくすくす笑いながら通り過ぎた。

「灯子は店の中にまで入れる訳にはいきませんから、看板娘になってもらっていますよ」

「ほ」

見れば、ちゃんと店の入り口の脇に座って、暇そうに欠伸などしている。時折、通行人に頭を撫でられて、しっかり集客に役立っているようだ。

「灯子の方が、お前より良い仕事をしているのじゃないかね？」

「そうかもしれないね」

ぱたりぱたりと、客に頭を撫でられながら、右巻きの尾っぽを振る白犬を見て笑う親子の間を、次男坊が割って入る。

「兄さんも父さんも、立ってるだけなら商売の邪魔ですよ。ほら、動いて動いて」

邪魔者扱いされて、二人は顔を見合わせた。

「やれやれ、次郎太には、もう負けとるなあ。わしも年を取ったもんだ」

「段々お袋殿に似て来ましたね」

彦江門が頭を掻きながら帳場に戻ろうとするのを、後ろから壮太が着いて行く。

「兄さんは引っ込まないで下さい」

着物の袖を引っ張られ、ずれた襟を直しながら弟の顔を見れば、さも、壮太が悪いというように、眉尻を上げて睨まれる。

「なんだい、帳場の手伝いをしては駄目なのか？」

「何を言っているんですか。兄さんが店に出て来たからには、接客以外に仕事はありませんよ」

ぷりぷりと頬を膨らませ、次郎太はせかせかと兄の背中を押して、店先に追いやった。

「きゃあ！壮太さん、今日はお店にいらっしゃるの？」

目ざとい女性客が、早々に壮太を見つけて群がって来る。

「壮太さんったら、滅多にお店にいらっしゃらないのですもの。今日はわたくし、運が良かったわ」

「あら、壮太さん、居るなら居るって仰いなさいな」

「ちよっと、この生地はどうかしら？」

一斉に話し掛けられても、そこは手馴れたもので、愛想良く笑いながら、壮太は娘たちを捌いてゆく。

「申し訳ございません。もう一つの仕事の手が離せないものでして。でも今日はこうしているのですから、お相手させていただきますよ。ああ、こちらの生地より、お甲様にはこの紅花の織物などいかがです？」

それでも、隙を突いて次郎太の腕を、ぎゅっとつねってやるのは忘れない。

別に接客が嫌なわけではない。

むしろ、綺麗で可愛いお嬢様方のお相手は大好きだ。店の品を買ってくれば更に良い。

しかし。

「灯子、入って来ちゃ駄目じゃないか」

すり、と、足元に擦り寄る犬の頭を撫でてやると、寂しそうに、くう、と鳴いて、また入り口に戻って行く。

「あの子、本当に壮太さんの事が好きだよねえ」

赤い唇が艶かしい、常連客が灯子の背中を見て呟けば。

「僕も灯子が好きですからね」

壮太も、いつも通りの返答をする。

「はい、はい。憎たらしい。そういうところが、また良いのだけど」
長くて綺麗な指で、壮太の顎を上向かせる。

彼女は壮太より身長が低いので、上向かせた壮太を、自分も顎を上げて見上げる事になるのだが、これがまた、色っぽい。

「それは、ありがとうございます」

その色っぽいさに微動だにせず、にっこりと微笑み返せば、鼻を摘まれた。

店の若衆は口をぽかんと開けて、そのやり取りを見ている。みんな思うことは同じだ。

・・・とっても、凄く、勿体無い。

わう！

灯子が入り口から心配そうに吠える。

「心配しなくても、灯子ちゃんには負けるよ」

べっ、と、彼女が舌を出した。

呉服問屋 円屋

「意地悪したら駄目ですよ。灯子は、僕の恋人ですからね」

「おや、どちらが意地悪なんだい？心配しなくたって、灯子ちゃん
は私のお気に入りの子だよ。意地悪は壮太さんにしかない
から、大丈夫さ」

にっこりと、革のバッグから財布を取り出して、艶かしい常連客
は、壮太の薦めた、西洋の大きな薔薇を染め付けた、粹な柄の反物
を注文した。

「円屋の長男坊が、店先に出ないのは、愛犬の機嫌が悪くなるから
だ」

そんな噂がある。

あながち、違うとも言い切れないのだが、本人曰く。

「灯子はそれくらいで機嫌なんか悪くなりません」
という事らしい。

ただ、女性客を相手にしている主人を見つめる灯子の瞳が、寂し
そうなのは事実なので、壮太がなかなか店に出ないのは、そんな理
由と、後は単に、面倒だから、なのである。

「ああ、そうだ。凜さん、木綿問屋のお静って、知っていますか？」

「お静ちゃん？この前死んじゃった、あの子かい？可哀想にねえ」
反物を包みながら、思い出したように話を振った。

憂えた貌で首を傾ければ、着物の襟から覗く白い首筋が目にも毒で
ある。

この客人。色っぽいのも当然で、花街の花魁だったお人だ。その
花街も、今や解体されて久しい。

「お静ちゃんは本当に良い子でねえ。そりゃあ、働き者で、可愛い
子だったよ。まったく、男っていうのは、どうして見る目の無い奴
が多いのだろうねえ」

意外にも、凜はお静を知っているようだ。

「でも、お見合いしたんでしょう？」

すっ呆けて、壮太はお静の話を進めた。

「あらあら。知らないのかい？ 壮太さんともあろうお人が」
少し驚いた様子で、凜は目を見開いた。

「済みません。お見合いしたくらいで、人が亡くなるなんて思えなくて。僕にもこの頃見合い話があるものですから」

相手を傷付けずに断る方法を知りたくって、などと、へらりと笑ってみせた。

「なんだ。知っているんじゃないか」

凜はにこりと笑う。

「でも、ちょっと間違っているよ。見合いはしていないのだからね」
「見合いをしていない？」

それについては知っていたが、わざと話の先を促した。

「・・・ふうん？ まあ、いいさ」

右の眉を、くいっと上げた凜だったが、促されるままに話を進めた。

「見合いの話を進めていたのは事実だけどね。その見合いの打ち合わせに、相手の染物問屋の旦那が、多岐衛門の旦那に会いに来たことがあってね」

知っていて当然と、どんどん話を進められて、壮太は少々焦った。

「え、えっと、染物問屋が木綿問屋のお静さんのお相手の居る店で、多岐衛門さんっていうのは茜屋の？」

茜屋というのは、木綿問屋の多岐衛門の店の名だ。

「そう。茜屋の旦那。なんだ。そこまでは知らなかったのかい？」
こつくりと、素直に頷けば、凜の顔に満面の笑み。

「よし。本当に知らないのだったら、ちゃんと教えてやろう」

「あれ？」

話を聞き出すために、あまり事のあらましを知らないような振りをして、凜の気を引いた事は、やっぱりばれていた。

人というのは、自分の知っている事を、相手が知らないと思えばそれだけで優越感を持つ。そこをつついて、色々と聞き出そうとしたのだった。

「この凜に、小賢しい手は通じないよ？ 壮太さん？」

むに、と、頬をつねられた。

「済みません」

「解れば良いよ。何か事情持ちかい？」

くいつと、顔を近づけられる。

伏し目がちに見上げられれば、普通の男であれば、それだけで彼女の虜になるだろう。

そんな色艶な目線にも、壮太はびくともしない。

「あんまり顔を近づけると、ぶつかっちゃいますよ」

「おや、つれない」

つ、と、凜は壮太から身を離す。

「いつか、壮太さんを泣かせてみたいのだけどねえ」

「何を仰いますやら。僕はいつだって、凜さんに泣かされていますよ」

そう言えば、凜はくすくすと笑った。

それを見ていた店子の男衆は、一様にまん丸に目を見開いて、動きが止まる。

女将が手を鳴らしながら急ぎ立てれば、皆顔を真っ赤にしてそそくさと仕事に戻って行く。

それだけ色っぽい凜に、壮太は顔色一つ変えないのだから、ある意味大物だ。

「嘔吐き」

「そうですか？」

「ああ。世の男が、みんな、壮太さんみたいだったら良いのに」

「それは、どうなんでしょう？」

皆が皆、仕事をさぼって絵を描いてばかりいては、世の中回らなくなってしまうのだろうか。

「俺としては、弟の次郎太みたいなのが沢山いたら、世の中平和に円滑に回ってくれるのじゃないかと思うのですがね」

「そりゃあ、次郎太さんも、好い男だけど」

沢山の男共を陥落してきた凜の色気にも微動だにしない。下心で近づいてきた女などは論外で、相手にもしない。

たとえ客であろうがなかろうが、彼の人を見る目は平等に容赦なく、確かだ。

人の真髓を、損得に流されずに、しっかりと見据える心根があるのが、壮太だった。

「本人が気付いていないのが、玉に瑕なんだけどねえ」

思わず、壮太の頭を撫でる凜だった。

「凜さん？」

「ああ、可愛いねえ、壮太さんって」

告げられた言葉に、きよんとする。

「俺を可愛いという人は、凜さんくらいですよ」

「そうかしら？ここに居る女達は、皆壮太さんの事は、可愛いと思っ
ていると思うけど」

凜相手では勝ち目が無いので、そわそわ、チラチラと、こちらの様子を伺っていた女客達に、凜は目線を流す。

皆、そそくさと視線をそらした。

「まあ、茜屋の話が聞きたきゃ、甘味所にでも誘っておくれよ。詳しいのを取り揃えておくからさ」

「本当ですか？それは有難い」

思わぬ申し出に、壮太は本気で安堵の吐息をもらした。

「何をそんなに調べているやら解らないけれど。壮太さんの事だ。訳ありなんだろう？」

凜がにっこりと笑うので、壮太も、にっこりと笑い返す。

「凜さんは話が早くて助かります」

「貸しは高い方が良くからね」

ひらひらと、手を振って円屋の暖簾をくぐってから、外にいる灯

子の鼻先に接吻をして、からころと下駄の音も軽やかに、凜は帰って行った。

「何？兄さん、また何か揉め事？」

ひよい、と、隣から、手にした反物をくるくると器用に回して片付けながら、次郎太が顔を出す。

「またって、俺はそんなに揉め事を起こしているつもりは無いぞ」
「もう既に揉めているよ」

次郎太が巻き終わった反物で店内を示す。

従業員は凜の出て行った先を、鼻の下を伸ばしてぼうっと見つめ、女性客達はそれぞれに、凜のおかげで壮太に近づけずにいた分、今にも壮太に襲い掛かりそうにむずむずしている。

すかさず次郎太が傍に來たおかげで、揉みくちにされずに済んだらしい。

「じゃあ、僕は仕事に戻りますから、くれぐれも商品に傷は付けずをお願いしますよ」

「お前、この頃俺に冷たかないか？」

「まさか？やっかんでなんかいませんよ？この色男」

睨んでやれば、けろりと返される。

「凜さんが、お前も好い男だって言っていたぞ」

「ほうほう。それは光栄ですが、凜さんは結局兄さんが好いのでしよう？」

ぱん！ぱん！と、手を叩いて、男衆の気を引くと、次郎太は一言。
「ほらほら、また女将にどやされたいかい？」

女将の名が出た事と、実は次郎太自身も、怒ればしっかりと恐ろしいので、でれりと凜の色香に浸っていた男衆は、一斉に身を正して仕事に戻る。

店が元に戻った事を確認すると、次郎太は店先を兄に任せて、あとは店の奥にさっさと引っ込んでしまう。そうでもない、と、壮太が抜け出してしまふからだ。

「ああん、壮太さん、こちらとこちら、どちらが私に似合うかしら」

「そうですね、そういう物よりは、こちらのお色とお柄であれば、お客様のお顔が映えて宜しいですよ」

「壮太さん、私にも見繕って下さる？」

「はい、喜んで。ああ、庄治、こちらの方にこの反物を合わせて差し上げて」

ぽんぽんと、女性客に反物を選んでゆく。

「どんな時にお使いの御用で？ 普段着であればこちらの小紋など」
俄かに店内が忙しくなる。

「ああ、文吉。どこへ行くんだい」

「へえ、女将さんの所へ」

目端に、文吉の小さな姿が見えて、壮太は引き止めた。

傍には見えないが、きつとどこかに艶子がいる。

「じゃあ、この柄の見本帳を、ついでに持って行ってくれるかい？」

「へえ。女将さんにお渡ししたら良いんで？」

「女将のところは次郎太もいるだろうからね。次郎太が欲しがって
いたものだから、奴に渡してやっておくれ」

次郎太鼻屑の文吉は、ぱっと嬉しそうな顔をする。

「へえ。解りました。失礼します」

声を掛けた時は、あんなに面倒臭そうな表情をしたくせに。

「あの子も現金だねえ」

前掛けをばたばたと揺らし、行き交う人の波を縫って店の奥へと
急いで行く。

「……ふむ」

その後姿に、臙脂色の影を見て、壮太は首を傾げた。

「本当に、くつついているのだね」

少し離れていたりするものかと思っていたが、お静の影は、文吉
にぴったりとくつついているようだ。

「だから、面倒だって言っているのよ」

ぼそりと聞こえた声は足元から。

見れば、黒猫がいつの間にやら足元にいた。

「じゃ、また後で」

一言告げて、さっと姿を消してしまった。

「ふむ？」

文吉は、まだ自分が幽霊などに取り憑かれているなどと、気が付いてもない様子だった。

「口で言っても理解してくれそうにないしねえ」

壮太が何か言った所で、川縁の枝垂桜の時と同じ様に、からかっていると思われて終わりだろう。

「どうしたものか」

兎にも角にも、文吉には気付いて貰いたい。

かといって、どうしたら信じてもらえるものか。

それとも、自分で気付いてもらうのを待つか。

臍脂色の影は、悪さをしようという雰囲気ではなかった。お静はただ、自分の姿を写した絵を、綺麗だと言ってくれた文吉の傍にいただけなのだろう。

では、壮太自身が、彼女を綺麗と言えば、文吉から離れて、壮太に鞍替えしてくれるのだろうか。

「もし、実行するとして、彼女に聞こえるように、不自然でなく言わなきゃならないし。難しいなあ」

着物の仕立ての寸法を測りながら、壮太は文吉と黒猫が入って行った帳場を目端に見るのだった。

「困ったわね」

こちらにも、困っている猫が一匹。

思っていたよりも、お静は文吉にぴたりと憑いて離れない。

「此れじゃ、本当に狩り様がないじゃない。やっぱり、いっその事さつくりと」

文吉を見張りながら、部屋の奥にある帳簿の詰まった棚の上で、尻尾をぱたぱたと、機嫌悪く振りながら物騒な発想をする。

死神の魂を狩る道具は、大概刃物だ。

それぞれの国や、死神本人の好みで形状は変わるが、刃物で魂と肉体とを切断して、冥途へと連れて行くのが普通だ。

今回のような、死んでもフラフラと彷徨っている幽霊となってしまうた魂の場合、何かしかの未練が、この世に魂を繋ぎ止めてしまっている。だから、魂と未練をその刃で断ち切ってやれば、冥途へと連れて行ける。

しかし、取り憑いてしまっているとなると、取り憑かれた相手の魂まで切ってしまうおそれがある。

「壮太はどうするのかしら」

先程、店の常連らしい女と何がしか話をしていたが、情報らしい情報は聞き出せていないようだった。

「さっさと仕事をしないと、閻魔様に怒られちゃうじゃない」

愚痴る艶子だったが、標的の霊ごと、憑かれた相手の魂まで狩ってしまえば、それこそ閻魔の雷が落ちるだけでは済まされないだろう。関係のない人間の寿命を、勝手に切り取ってしまうことになるのだから。

「死神は魂を狩って、冥途へ連れて行くしか出来ないっていうのが、そもそも面倒なのよ」

人間の、霊媒師とかいう連中みたいに、追い出すなり、無理やり引っぺがすなり出来たら楽なのに。

それでも、その霊媒師という人種そのものが、大概は嘘っぱちで、本当に霊を払っているのかといえ、まともに払えている者など、艶子はほとんど見たことが無かった。

そもそも、何か原因不明の凶事等が起きた場合、悪霊のせいにして、さあ、払いました、後はこうしなさい、そうしたらもう大丈夫、等と言ってやれば、相談に来た連中は安心するのだから、結構大げさな人生相談なのかもしれない。

「本物の御祓い屋も、いるけどね」

壮太がそれなら、話は楽に進んだだろうに。

「あいつは見えて絵が描けるくらいだから」

その絵で、霊の束縛が出来るのだが、地縛霊などには意味がない気がする。それでも、うろうろされるよりは良いのかもしれないが。

「おや？」

壮太が、帳場へ顔を出した。

「こっちに、艶子はいませんか？」

どうやら自分を探しているようだ。

にゃあんと、一声鳴いて、棚から壮太の頭に飛び乗った。

「あれま。いつの間に入って来ていたのかね」

艶子に飛び乗られ、首を捻って痛がる壮太を、女将の彰子が驚いて見やる。

「さっき、入って行ったのを見たので、まだいるかと思ひましてね」
首をさすり、ずるりと頭から背中へ落ちた艶子を、壮太がおんぶする様に後ろ手で支えた。

「もうお昼だろ。客が引いたなら、皆に交代で昼飯を食べさせてや
つとくれ」

「今、やっていますよ。さっき次郎太が呼びに来ましてね」

手の空いた者から、順番に、食堂代わりの土間へ向かわせているのだと説明を付け足せば、彰子はくると帳場を見渡した。

ぱちぱちと算盤を弾く音も、まばらになっているようだ。午前中の仕入れと出荷、売れた分の清算と仕立て屋への配送準備なども、ひと段落が着き始めているのだろう。

「ふむ。じゃあ、計算が終わった連中から休憩に入つとくれ。ああ、その訪問着はそっちなじゃないよ！洗い張りに出すんだよ。大事な品なんだから、間違えないとくれよ！」

てきぱきと指示を出す。

「お前も、サッサと飯を食べな。どうせ午後から出掛けるんだろう」
ふん、と、腕を組みながら、鼻息混じりに彰子は自分の長男坊を睨んだ。

「よくお分かりで」

「凜ちゃんの声がしていたからね。それに、大体その黒猫がいる時

は、あんた出掛けるじゃないか。・・・灯子が泣くよ？」

「浮気なんかしませんよ」

呆れ半分に言われれば、へらりと笑って返す。

「じゃあ、有難く、抜け出させて頂きますよ」

艶子を背負ったまま、帳場を出て行く壮太の背中を、文吉が睨んでいるのを、艶子は見逃さなかった。

「やれやれ。相当嫌われているわねえ」

ぼそりと呟けば、壮太も気が付いていたらしく。

「文吉は次郎太鼯肩だからね」

笑いながら答える。

文吉の、真っ直ぐで、そういうところが可愛いらしい。

「まあ、それでついつかつかってしまって、余計に嫌われてしまうのだけど」

「分かっているなら改善しなさいよ」

「嫌です。からかうと面白いのなもの」

「この、天邪鬼」

廊下で擦れ違う使用人たちが、一人でくすくす笑いながら通り過ぎる壮太を、足を止めて振り返るのも構わずに、楽しそうに自室である離れへと向かうのだった。

一葉庵

「女将さんは、やっぱり壮太様に甘い」

一人眉間に皺を寄せ、文吉は黒猫を背に貼り付けたまま、帳場を後にする壮太の背中を目で追っていた。

姿が見えなくなれば、ふん、と鼻息も荒く、不機嫌に手元の注文書を束ねてゆく。

「文吉も、それが済んだらご飯を食べておいで。腹が減っただろう」頭を撫でる大きな手に、見上げれば彦江門の顔があった。

「あ、ありがとうございます。もう少しで終わりますので」

「早くしないと、食い逸れてしまうからね。真面目なのも良いが、子供は成長するのが一番の仕事だよ」

もう一度、文吉の頭を撫でると、彦江門は女将を呼んで、何か話し込む。

午後からの仕事の打ち合わせだろう。

この店に、丁稚奉公に来て一年。仕事にも随分慣れたし、旦那も女将も若旦那も、みんな厳しくも優しい。跡継ぎの次郎太などは、常に従業員に氣遣って、仕事をし易くしてくれる。

文吉は円屋の家族が大好きだ。ただ一人を除いて。

長男坊の壮太だけが、円屋で浮いている。

道楽で絵を描いて、店をほとんど手伝わない。売れる絵ならまだしも、本人に描いた絵を売る気は全く無いらしい。

今日も、久しぶりに手伝うのかと思えば、とつとと出掛けてしまふというし。

「壮太様の分の負担が、全部次郎太様に被さってしまって、次郎太様も大変じゃないか」

「僕の心配かい？」

まとめた注文書を棚に仕舞おうとして、後ろから声を掛けられ、文吉は飛び上がった。

「そんなに驚かなくても良いのに」

「じ、次郎太様！」

にっこりと、父親譲りの柔和な笑みを浮かべ、次郎太がすぐ後ろに立っていた。

「文吉は優しいねえ」

頭を撫でられながら、とりあえず棚の中に注文書を仕舞う。

「じ、次郎太様は、腹が立たないのですか？」

思い切って聞いてみる。

「どうして？」

「だって・・・」

自分の兄が、あんなにいい加減で。どうして平気なのだろう。

「まあ、文吉の言いたいことも分かるけど。僕は兄さんが店をあまり手伝わない理由も知っているし、絵を描く理由も知っているから、腹は立たないよ」

「理由・・・？」

理由なんて、あるのだろうか。

ただ、面倒くさいから。ただ、描きたいから。

それだけだと思っていた。

「あはは。そう見えても仕方ないからねえ。うちの兄さんは」

笑いながら、次郎太は文吉を連れて、土間へと向かう。

前を進む次郎太の大きな背中を追いかけて、文吉は首を捻りながら、理由について考える。

「うちの兄さんは、いつものりくらりとしているからね。解り辛いのだろうか」

全くもってその通りだと思う。何を考えているのか解らない。

「文吉は兄さんが嫌いかい？」

ズバリと言われて、どう答えたものやら、しどろもどろしてしまう。

「き、嫌い・・・です」

意を決して正直に答えれば、次郎太が笑った。

「正直で良いね」

「すみません。自分のご兄弟を、悪く言われて気持ちの良い人なんていないですよ」

誤れば、不思議そうな顔をされた。

「そうかな？それは人によるよ」

さらりと言ってしまふ次郎太に、文吉は一瞬きよんとして、それは自身の事を言っているのだと思い、同意をしようと口を開きかけた。

「まあ、僕は兄さんが好きだから、確かに、あまり良い気はしないけど」

次郎太に遮られて、はっとする。

「す、すみません」

次郎太が、壮太を慕っている事は、周知の事実であるのに。やっぱり次郎太も、自分と同じに壮太が嫌いなのかと思ってしまった。的の外れた、自分に都合が良いすぎる解釈をしてしまった事が恥ずかしくなって、思い切り頭を下げる。

「謝る事ではないよ。僕が文吉から聞き出したのだからね」

次郎太が、文吉を安心させるように、にこりと微笑む。

「兄さんは天邪鬼だし、結構不器用だから。誤解されるのは仕方がないし、誤解されてしまうのも、兄さんに責任があるしね」

そんな会話を続けていたら、いつの間にか土間に着いてしまう。

朝、がらんとしていて、物寂しさを覚えた大きな卓も、今は人数がその席を占拠して、賑やかな事この上ない。

その間を、おみよを含め、台所を任されている女衆の、威勢の良い声飛び交っている。

「さ、食べておいで」

ぐいと背中を押され、文吉は朝とは違う、いつも通りの食卓へ足を運んだ。

朝は店の用事で出遅れて、一人寂しい食卓だったので、おみよが食事を運んでくれたが、今度はそうは行かない。

台所へ行つて、自分の分の膳を取りに行かなければならなかったし、席も見つけなければならなかった。

次郎太の、壮太についての話は後で考える事にして、文吉は慌てて台所へと向かった。

「？」

目端に、臙脂色。

朝から何度か見る色は、地味な臙脂に、品の良い、ぼかしの入った女物の着物であるのは、おぼろげながら解っていた。

文吉は、店の誰かが着ている色が目に入ってくるのだらうと、最初は気にしていなかった。しかし、ここまで何度も目に留まるのは、何故だろう。

臙脂なんて、結構見る色で、珍しくもない。男が着ていたら、それは目立つが、そんな色を着て歩く男は、歌舞伎役者か、伊達を氣取る阿呆者くらいだ。

「あれ？」

そこまで考えて、きよろきよろと、あたりを見回した。

ざわざわと相変わらず騒がしい食堂だが、先程見えた筈の臙脂色の着物を着ている人物が見当たらない。

食堂でなら、みな席につくから誰が着ている着物か分かんと思つていたのに。

「おかしいな？」

一瞬、考え込んだが、同期の丁稚に声を掛けられて、思考は中断される。

「おい、文吉！ここ、空いているぞ！」

「達治！ありがとう」

ひとまず、その着物の人物も、探し出せないだけで、この場にいる筈だ。そう思うと、さして気にする事でもないと、文吉は丁稚仲間の確保してくれた席へと座り、ようやくありつけた昼飯に、集中する事を優先した。

「あれ？兄さんは？」

文吉を食堂へと追い立てて、自分は両親の膳と、自分の膳を用意してもらい、次郎太は家族でいつも食事を取る部屋へと移動した。そこに、既に先に飯を食べている筈の兄の姿がない事に気付く。誰に聞くと無く、口について出た言葉に、返ってきたのは母親の声。

「あいつだったら出掛けたよ」

「あ。母さん」

店に出ている時であれば、女将と呼べと、耳朵を思いっきり引っ張られているところだが、今は食事のための休憩中。

ひと時の家族団欒といったところか。

「え？もう出掛けたの？」

常連客の凜と、外で会うような話をしていたのを思い出す。

とにかく、障子を閉めていつもの畳の上に座り、膳が整うのを待つ事にする。

「なんだ。久しぶりに店先に出てきたと思ったのに」

溜息混じりに呟けば、彼らの母親は眉間に皺を寄せた。

「あいつが大人しく店を手伝うタマかい？」

「そういえばそうですね」

壮太が店を手伝うのは、気まぐれか、何か目的があつてのことか。

「好奇心が旺盛なのはよろしいがね。少しでもその好奇心を、商売に向けちゃあくれないものかね」

「本人に言つて下さいよ、そんなの」

「言つても聞かないからお前に愚痴っているのだろうか」

「ああ、そうですか」

きっぱりと言われてしまえば頷くしかない。

「父さんは？」

もうそろそろ顔を出しても良さそうなこの店の主が、まだ姿を現さないで、次郎太は呼びに行こうかと腰を浮かせた。

「おや、膳はまだかい？」

障子が、すい、と開いて、彦江門が顔を出す。

「ああ、父さん。今呼びに行こうと思っていたところですよ」

浮かせた腰を、もう一度畳の上に落ち着かせ、父の座るのを眺めやる。

「先程、膳を運んで貰うようお願いしましたから、もう少しで届きますよ」

「やれやれ。腹が減って仕方が無いのだが」

彦江門が言うと同時に、ほとほと、障子戸が叩かれる。

「おお、待っていたよ。早くお入り」

障子戸が開き、おみよを連れて、女中頭のお律が三人の食事を運んで来る。

「お待たせ致しました」

手際よく目の前に置かれて行く膳に、彦江門はほくほくと嬉しうだ。

膳を持って来てくれた二人が、失礼しました、と言って退席すると、彦江門がいただきます、と声を出し、残りの二人も、いただきます、と言って、箸をつける。

いつもの食卓風景である。

「何か変わった様子はなかったかい？」

食べながら、彰子の質問に、次郎太は特に無いと告げようとして、少し考える。

「兄さんが此処にいない事以外でしたら、文吉かな？」

「壮太がいなくなるのはいつもの事だろう？」

「文吉が何かしたかい？」

壮太が、家族団欒の時間にも、断りも無くいなくなるのはよくある事で、夫婦ともに驚きもしない。しかし、文吉は別だ。

丁稚の中でも真面目で、年齢の割に、文句も言わずによく働く。

将来の有望株である。

「今朝、使いに出してから、なんだか落ち着かないというか」

時折、きよろきよろと、何かを探している風な。

「お使いは、きちんとこなしてくれた様だがね。何かあったかね？」
「さあ、それは分かりませんが。使いの途中で、兄さんに会ったようですけど」

「壮太に会ったからって、仕事中にそわそわする理由にゃならないだろう？」

「それはそうなんですけれどね」

壮太がふらふらしているといっても、ほぼ毎日顔を合わせているのだから、道端で偶然会ったところで、何かあるわけでなし。

「ふうむ？」

三人が三人とも、考え込む。

「まあ、あの子が壮太をあまり良くは思っていないっていう事だけは、確かだから」

彰子が、沢庵に箸をつけながら、溜息を吐き出す。

「ああ。そうですねえ。はつきり、嫌いだって言われちゃいましたしねえ」

「・・・・・・・・・・」

次郎太の言葉に、夫婦は顔を見合わせて、深く深く、息を吐き出した。

「まあ、そのうち、馴染むだろう」

「壮太の事を理解してやるには、暫く時間がかかるだろうしね」

もくもくと、朝食を口に運び出した両親に、次郎太は、くすくすと笑った。

「いや、僕だって放っておこうとは思っていないですからね。文吉には、釘を刺しておきましたから」

「釘って、何て言ったんだい」

「兄さんの行動は、ああ見えてきちんと理由があるって、言っておきましたよ」

壮太の行動の理由。

「お前。そりゃ、理由っていうのか何ていうのか」

「まあ、理由といえば理由か」

夫婦は複雑な表情をした。

昔から、人には見えないモノを見てしまう長男坊を、理解できる人物は少ない。

「理由の内容については、あの子は真面目なので、伝えていませんけどね」

幽霊が見えてしまう体質を、家族でさえ理解するのに時間が必要だった。

それを、唯でさえ壮太を嫌っている文吉に、理解させるのは難しいだろう。

「まあ、うちの店の全員が、知っているわけではないからね。良いのじゃないのかい？放っておいても」

「そりゃあ、まあ、そうですね」

「文吉の行動は、何か探し物をしている様子なのだろう？」

「探し物、というよりは、探し人の様ですが」

「じゃあ、誰か好いた子でも出来たかも知れないし、今日一日、様子を見たらどうかね？」

柔和な父の顔を見ていると、まあ、そうか、とも思える。次郎太はそれ以上、文吉について、深く考えるのをやめた。

きよろきよろして落ち着きが無いのは事実だが、それで仕事に差し障る訳でもないのだから、様子は見ていなければならぬだろうけれど、そんなに気に留めることでもないのかもしれない。

「それにしても、嫌われている当の本人は、どうしているのでしょうかねえ」

「あれで固定客を掴んで離さないのだから、不思議だよ」

同性には嫌われても、異性には好かれる壮太は、不思議といえは不思議である。

「女性は敏感な生き物と云いますからね。凜さんなんか、気付いているのかもしれませんが？」

「そうかもしれないね」

暢気にそんな事を語りながら、長男を除いた円屋一家の団欒の時

間は過ぎてゆく。

壮太がここにいたら、きっと変な顔をして、家族の会話を聞いていたに違い無い。

「壮太さん」

声を掛けられて、壮太は振り向いた。先程からくしゃみが出るのは何故だろう。

「やだ、風邪でも引いた？」

「いえいえ。そんな事はありませんよ。きっと、お昼ご飯の家族団欒をさぼったので、次郎太あたりが、ここぞとばかりに僕の悪口を言っているでしょう」

家族で自分のことを噂していると決め付ける。あながち間違ってもいないのは、本人の知らぬ事である。

離れへ戻ってから、外出しやすいように袴を履き、財布を取り出して懐へ入れ、とっとと出て来た。

艶子は留守番で、そのまま文吉の見張りをしているはずだ。灯子は、もちろん今現在も足元にちょこんと座っている。

店先でお客に撫でられて、頭の毛が少々跳ねていたので、凜はそれを撫で付けて落ち着かせてくれた。

壮太の格好は、上は店でも着ていた、さっぱりとした麻と木綿の織物の着物で、袴は紺地の木綿の履き慣れた物だった。女性と会うにはいかなものかといういでたちだが、なんだか壮太にはしっくりと似合う。

対して凜は、先程店に来た時と変わらない、浅黄色の柔らかな色合いの着物に、半襟は刺繍の梅の花、帯は染付けの半幅と、彼女らしい粋な着こなしだ。

近頃は洋服に腕を通す人も増えたが、呉服屋の壮太はもとより、凜も好んで着物を着た。

「日本人に一番似合うのは着物」
というのが、彼女の持論らしい。

「その一葉庵に、皆いるよ」

「そうですか。助かります」

約束通り、凜はお静に詳しい人間を集めておいてくれたらしい。

「行動が早いですね」

「そりゃ、壮太さんの行動が早いだろうからね」

人を集めておくと言ってくれてはいたが、今朝の話である。昼過ぎに、人が集まっているとは思えず、壮太はとりあえず凜から話を聞きだすだけと黙っていたのだ。

この短時間に、声を掛けただけで人が集まるのは、凜の人柄ゆえだろう。

灯子に、店の前で待つように頼み、一葉庵の暖簾をくぐって店内に入れば、窓際のテーブルに、一七ほどの初々しい年頃の娘と、三十路は超えているかと思われる艶のある女性とが、二人向かい合っていて、カステラを摘みながら仲が良さそうにおしゃべりしていた。

他に客の姿は見当たらない。昼時で、甘味所は暇らしかった。

「お待ちどうさま」

片手を上げて軽く挨拶をする凜に、二人とも笑って応える。

「凜ちゃんの頼みだもの。来ないわけには行かないでしょう」

「あんみつとシベリアケーキ追加で許しちゃう！」

朗らかに二人を迎え入れてくれる雰囲気は、女の子同士特有のそれだ。

「はいはい、いくらでもお代わりをしたら良いよ。ぶくぶくに太ったってあたしの知ったこっちゃないからね」

「凜姉さんひどおい」

「ああ、では、ここは僕の奢りということだ」

につこりと微笑んで、凜の背後から顔を出せば、黄色い悲鳴があった。

「きゃああ！ 円屋の壮太さん？ ヤダ本物だわ！」

「えっと？」

予想しなかった反応に、壮太が戸惑っていると、凜が目目の前の若

い娘の頭を、思い切りはたいた。

「痛い！」

「少しは落ち着きな！ 壮太さん、この煩いのがあたしの弟子みたいなもんで、三味線屋の禎子。で、そちらの別嬪が、件の木綿問屋で下働きやつてるお楊さん」

「あ、よろしくお願いします」

ぱっぱと紹介を始める凜に合わせ、壮太はぺこりと頭を下げた。

「はい、それで二人とも。もう知っての通り、この人が壮太さん」

「噂に違わず、好い男でいらっしやる」

「ありがとうございます」

お楊に褒められ、素直に礼を言う。

目の細い、パーマネントで緩くカーブした髪に、品の良い簪を挿し、着物も江戸縞の粹な着こなしだ。凜に負けず劣らず艶のある女性だが、凜のような華やかさとは違い、しっとりとした美人、といった感じだ。

「姉さんも壮太さんも、早く座って。はい、お品書き」

忙しない禎子の方はいえ、お楊と反して長い髪に大きなリボンを飾り、三味線屋というわりには、薄い蜜柑色のワンピースを着ている。大きな襟だけが白くて、印象的だった。

凜と壮太は、それぞれ向かい合って二人の隣に座り、禎子の差し出したお品書きに目を通す。

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりでしょうか？」

薄い紅花染めの紬に、白いフリルの前掛けをした給仕の女の子が、新しく増えた客の二人に、グラスに水を入れて持って来てくれる。

「あたしはみたらしと、お茶のセットで」

「じゃあ、僕は特製饅頭と、ほうじ茶で」

凜と壮太がさっさと注文を決めると、給仕はにっこりと営業用の笑顔を残して、早々に店の奥へと引き返し、間を置かずに、注文の品を盆に乗せて戻ってきた。

余程暇なのだろう。

目の前に並べられた甘味を眺めて、壮太はふと、不安になった。
「この店、美味しいのですか？」

昼時は食堂に客が流れるとはいえ、あまりにお客の数が少なすぎる。それは、この店に何か問題があるからなのではないのか。

「大丈夫よ。味は保証するわ。甘味所っていったって、普通は甘くないようなものも置くのだけれど、この店は店主が心底甘党でねえ。ランチ用の軽食くらい置けば良いのに、本当に甘いものとお茶しか置いていないから、昼時はよっぽど甘党のお客しか寄り付かないのさ」

なので、買い物客や、使いや何かの用事の寄り道、仕事の合間の休憩などに使用する客が自然と多くなり、どちらかといえば昼過ぎから夕方に込むのだそうだ。

ためしに、自分が注文した特性饅頭とやらを、ちょっと摘む。

しっかりと練った漉し餡が、甘過ぎず、程よく舌の上で溶けて、しつこさが残らない。

「なるほど。特製ですか」

女性は総じて、こういう凝った甘味は好きだろう。

この店が、彼女たちの集合場所というのはなんとなく理解できた。「でも、あの。こんな所で亡くなった方のお話を伺うのは気が引けるのですが」

壮太が、なんとなく気を使えば、彼女たちは一瞬、きょとんこちらを見詰めた。

「・・・やあだ、壮太さんったら、変なところに気を使わないでおくれよ」

「そうですよ。気にしないで下さいな」

「お静ちゃんはねえ、このお店が大好きだったの。だから、彼女の話をするならって、ここにしたいの」

お静が気に入っていたという店で、彼女を偲んで話がしたいと、彼女たちはこの店を選んだのらしい。

「そうですか。本当に、趣味の良い女性だったようですね」

出される菓子のももそうだが、この一葉庵は内装もアンティーク調で、落ち着いた調度品に、店内に流れる曲も、異国の音楽ではあるが、煩くもなく、それでも調子の良い曲だ。

最近流行りだしたものが、流行る理由も分かる気がする。

「そうなの。お静ちゃんね、そりゃあ、確かに美人ではないけれど、だからって、そんな醜い顔をしていたなんて思わないわ。口が大きくて、肌も黒かったけど、彼女なりにお洒落に気を使っていたし、お化粧だって、自分に似合うものをもって、落ち着いた色を好んでいたわ。確かに似合っていたし、趣味はとも良くて。私だってお洋服や着物を買う時は、お静ちゃんに見立ててもらうくらいだったんだから」

禎子の今日の服装も、お静が選んだものだという。

薄い蜜柑色のワンピースは、彼女の長い黒髪と、活発そうな大きな眼、肌は白い方だろうか。それらをきちんと映えさせて、おまけに彼女の明るい性格にも合っていて、とても似合っていた。

「お客さんもね、彼女に見立てを頼む人が多くてね。誰もあの子が気に入るほど、あの子の顔をとかく言う人はいなかったくらいで。旦那様も、お静ちゃんのおかげで、お客さんが増えたって、彼女を可愛がっていたし。本当に良く働く子で」

お楊は、目線を落として、そっと目元を拭った。

「すみませんね、しみりしちゃって」

「いえ、お辛いのには無理に話して頂いて、申し訳ないのはこちらですから」

につこりと笑い返す。

大抵の女性は、この笑顔でくらしとするらしいが、壮太自身に自覚はない。

壮太はどちらかといえば子供っぽい顔立ちで、歌舞伎役者のような美形というわけではない。

それでも整っている事には変わりはないが、本人は自分の顔には無頓着なので、母や弟に、無精髭を注意される事もしばしばある。童

顔に髭が生えれば似合わない事この上ない。

しかし壮太が髭を剃る理由は、灯子が嫌がるから、それのみである。

それでも世の女性たちは、壮太の顔がお気に入りらしい。

そんな壮太の顔を、お楊も、凜も、禎子も、揃ってじっと見つめている。

「あの？」

さすがに気になって、自分の顔がどうかしたのか聞こうとした。

「あー、お静ちゃんって、こんな感じよね」

「は？」

口を開きかけた壮太を遮って、唐突に口を開いた禎子の言葉は、わけが分からない。

「そうねえ、壮太さんみたいに顔が整っているわけではなかったけれど」

「人好きのするというか、内面から人の良さが滲み出るっていうか」
その内面の人の良さが顔にも表れていて、魚みたいに小さくて離れた目も、大きな口も、色黒さも、愛嬌になっていたのだという。

ここに艶子がいれば、壮太に愛嬌があって人が良いのだとしたら世の中平和で救われまくりだわ、などと言いそうだ。

「ええと、何だか知りませんが、それはとてもお静さんに申し訳がないような気がします」

それでも自分がいいかげんな性格だと自覚している壮太だ。そんなに真面目で良く働いていた人と、自分の内面が似ているなどと、なんとなくお静に悪いような気がした。

「そんなお静さんに、何があったのでしょうかねえ？」

人当たりも良く、客足を増やすほど趣味も良くて働き者だった彼女。けして美人ではなかったというが、内面から滲み出る性格の良さで、その顔には愛嬌もあったらしい。

本人は気にしていたとはいえ、さほど不細工でもなかったように思える。

「そうね、あのトンチキの染物問屋。何といったかしら」

口に出すのも腹立たしいとばかり、お楊が袖を口元に当てながら、眉間に皺を寄せた。

「川田屋よ。川田屋の達之介。見合い相手にしようとしていたのは、紋二郎らしいよ」

茶をすすって、みたらし団子を口に放りながら、凜が付け足す。

この店のみたらし団子は、串に刺さずに、そのまま皿に盛られてタレにかけてある。竹の爪楊枝で食べるのが独特で、これが食べ易くて旨い。

「紋二郎って、あの紋二郎？」

「その紋二郎」

「あら、意外」

「あれ？お楊さん、知らなかったの？」

「だって教えてもらえなかったもの。相手が紋二郎だって分かっていたのかしら、お静ちゃん」

「そうさねえ、分かっていただろうねえ」

「川田屋の主人って、本当に腹が立つわ」

どんどんと、壮太を置いて女三人で何やら話が進んでゆく。

「紋二郎というのは？」

口を挟んでおかないと話が分からなくなりそうで、壮太は三人の中に、無理やり割って入った。

「壮太さんはご存じないの？」

禎子が、首を傾げて不思議そうに、質問に質問で返してくるので、壮太は腕を組んで考え込む。

染物問屋の川田屋は、円屋とは商売での付き合いが無いので、名前くらいしか聞いたことがない。

その川田屋に居たという紋二郎という人物。

何か有名なのだろうか？

「すみません、俺には分かりかねます」

染物問屋は円屋も最前になっている店がいくつかあるのだが、その

中に川田屋は入っていない。

父の彦衛門が相手にしていなかったくらいなのだから、店の経営に問題があるのか、もしくは店の主の人柄が問題なのか。

「円屋は商売相手を選ぶのが巧いからねえ。壮太さんが知らないのも無理はないのかもしれないよ」

にっこりと、凜が微笑む。

「紋二郎っていうのは、川田屋きつての出世頭で、行く行くは店を任されるのじゃないかとまで噂されていた人物なんだよ」

染物の腕も然る事ながら、店で染めた反物や小物を売るのも巧かった。

新しい事にも挑戦する新進気鋭の染物職人で、歌舞伎小屋からの注文も多かったという。

「歌舞伎では、手拭やなんかを客に配ったりするからねえ。柄の奇抜さも重要だし、色も気を使う。役者の幟旗や、暖簾なんかも染めていたらしいから」

「両国からの注文も多かったって、うちの旦那さんが仰っていたくらいだから、繁盛はしていたようだよ」

「それもこれも、紋二郎が居たから出来た事さ」

つまり、紋二郎という職人のおかげで、俄かに店が活気付き、商売も成り立っていた、いわゆる成金、というものらしい。

「そんな人なら、普通、自分の養子にするものじゃないのかな？」

店を任せるほどの人物となれば、その家に娘が居れば婿として迎え入れるか、そうでなければ直接養子にするか。それが普通だ。

「それが、何を考えたのだから。暖簾分けをすることになって」

「は？暖簾分け？」

大きな店ともなれば、様々な理由はあるにしろ、暖簾を分けて店を増やし、更に店を大きくする場合もある。

しかし、店を継がせられるような人物を、暖簾分けで追い出してしまっただけの意味がない。新しい店舗で修業を積み重ねるにしても、いざ、本店を継がせた時に、二店舗目はどうするのか。他に有望な

職人がいるなら良いが、三人の話を聞く分に、そういう事でもないらしい。

それではリスクが大きい気がした。

「川田屋の主人が、紋二郎に店を継がせる気が無くなったらしいわ」「それはまた……。どうして？」

禎子が、カステラを一切れ、ほおぼった。

「どうもね、紋二郎の才能を、妬んだのじゃないかって話よ？」

「……。川田屋の主人が、ですか？」

お楊も、禎子も、こくりと頷いた。

「要するに、自分の代で築き上げた財を、紋二郎に追い越されそうになって、悔しくなったのよね。その財だって、紋二郎が職人として成長するまでは、たいしたこともなかったのだけど」

「頭が固いからねえ。あの達之介って人」

昔は、法事や町の小売店に卸す小物を扱った、小さな店であったらしい。それが、紋二郎の染物が評判になるに従って、お抱えの職人も、紋二郎に習って自由な色や柄を染めるようになり、それが更に評判を呼び。

「職人たちの自由にさせたところまでは良かったんだけど」

「それが、紋二郎が有名になればなるほど、達之介が彼に辛く当たる様になって、店の中もかなり険悪だったらしくてね」

「ああ、それで暖簾分けですか」

「そういうことだね」

自分より才能に溢れる人物を、店の跡継ぎにするのは悔しい。なら、暖簾分けをして、新しい店の店主にしてしまえば、誰も文句は言うまい。

店主は店主だ。それで皆納得するだろう。

そんな考えであつたらしい。

「馬鹿ですねえ」

ずず、と、ほうじ茶を一口飲んで、壮太は一言そう口にした。

見合い相手

そんな事をすれば、ますます従業員や職人たちの心は達之介から離れてしまうだろう。下手をすれば、その紋二郎を慕っている職人や従業員は、皆その新店舗とやらに取られてしまいかねない。

「その、川田屋の達二郎なる人物が、了見の狭い尻の穴の小さな男だという事は分かりました。うちの父が、相手にするわけがありませんね」

下の人間を大切にしない組織は、本当の意味で成長しない。例えば物事が巧く行っている様に見えても、いずれは破綻をきたす。

組織というものは、商売であれ国家であれ、底辺の人間で成り立っている。けして、上にいる人間だけで、世の中が回るわけではない。

「お静さんには悪いですが、商売の基本も出来ていないような店に、嫁がなくて良かったと僕は思いますけど。勿体無い」

ぱくりと、饅頭の最後の一欠けらを口の中に放り込んだ。

「・・・・・・なんです？」

女性陣が、三人とも壮太を呆けた様な顔で見ているので、壮太は居心地が悪くなって、給仕の女の子を呼んだ。

「いやあん！壮太さんったらやっぱり良いわあ！」

「好感が持てますねえ」

「だから、好い男だって言っているでしょうが」

こんな事くらいで好感が持てるなら、うちの次郎太だって捨てた物じゃないのだけれど。そんなことを思いながら、壮太は醬油団子を追加注文する。

そういえば、昼食を抜いて来ていたので、腹が減っていた。

「皆さんは何か食べますか？お礼としては足りない気がしますが、俺が奢りますよ」

壮太が全員の顔を見渡せば、楨子が嬉しそうに手を上げた。

「はい！あたしシベリアケーキ！」

よほど好きなのか、目がきらきらしている。

「じゃあ、お言葉に甘えて、私はカステラの追加を」

「あたしもカステラ」

お楊が遠慮がちに申し出れば、凜も同じものが食べたくなったらしい。

それらを注文して、お茶のお代わりもお願いすると、やっぱり先程と同じ様に、すぐに持ってきてくれた。

「ところで、その紋二郎ですが」

全員に、注文の品が行き渡ったところで、壮太が顔を上げた。

「彼に暖簾分けをするとして、何故、見合いを？」

それについては、理由は簡単だった。

「分店とはいえ、一国一城の主になるのだから、所帯を持て、というところじゃないかしら」

お楊が、上品に口元を隠しながら答える。

「ああ。なるほど」

「そこにちょうど持ち上がったのが、お静ちゃんの結婚話だったのだろうね。それで、川田屋としては、ある程度付き合いがある、大きな店と、更に強い繋がりを持ちたかったってことさ」

凜が、溜息をつく。

「普通でしたら、店のお嬢さんを貰うところですが、生憎、うちの茜屋にはお嬢さんがいませんので、妥協しなされたのでしょうか」

そこで妥協される覚えもないのですが、と言って、お楊は湯飲みを傾けた。

「落ち着くには、お茶が一番ですわね」

寂しそうにお楊が呟いて、湯飲みの中の、まだ残っている、暖かで透明な緑色を見詰めた。

「お楊さんは、仲良かったものね」

「妹みたいな子だったから。でも、年でいったら、禎子ちゃんのほうが近いでしょう？あの子から、何か聞いていなかった？」

禎子は少し俯いて、手元のシベリアケーキを、フォークで崩す。答えて良いものかどうか、迷っている。そんな仕草だった。

それから、ふう、と、ゆっくり息を吐き出して、ぽつりと呟いた。

「……お静ちゃんね。好きな人がいたの」

その言葉に、一同の視線が一斉に禎子へ集中した。

「……本当？」

驚いて、細い眼を見開きながら、お楊が口にした。

それに、禎子がこくりと、小さく頷く。

「それじゃあ、お見合いが嫌で？」

好いた男がいたのなら、見合いが嫌で入水自殺をしたのかと、お楊の声が震える。

「ううん。そうじゃないの」

禎子が、一生懸命首を振って、お楊の危惧を否定した。

「むしろ、お見合いがしたかったんだと思う」

「え？」

「それは、どういう……？」

全員の疑問符に、禎子は目線を上下させて落ち着かなかったが、お静ちゃんごめん、と、小さく呟いて、目線を下に落としたまま告白した。

「お、お静ちゃんの好きな人が、お見合いの相手だったから……

！」

「！」

小さくて、ともすると聞き取れない様な声だったが、その内容は全員を驚かせた。

「……お静ちゃん、紋二郎が好きだったの？」

凜の質問に、目に涙を溜めて、禎子はまた、こくりと頷いた。

「取引で、紋二郎さんが店に何度か来た事があったらしくて。普通の人は、お静ちゃんの顔を見て、一度は驚くらしいのだけど、紋二郎さんだけはそんな事もなく、最初から普通に接してくれたって……言っていたの」

好いた相手との見合いなら、断るはずもなし。ましてやそれが原因で、自殺するはずもなし。

「そう。お静ちゃん、恋をしていたの・・・」

出来れば叶えてやりたかっただろう。お静の恋に、お楊も悲しうに微笑むだけだった。

「紋二郎さんとのお見合いが決まって、あの子、自分に自信がない子だったから、ずっと、私なんかで申し訳ない、私なんかで良いのかしらって、言ってる。でも、凄く嬉しそうで。私も、良かったねって、言っていたの。お見合いで、紋二郎さんに気に入って貰える様に頑張るんだって、お静ちゃん、一生懸命で」

そこまで一気にまくし立てると、堪え切れなくなったのだろう、楨子の大きな眼から、ぼろぼろと涙がこぼれた。

「では、川田屋の主人に目通りして、醜女って言われたのは？」
凜が、お楊を見やった。

こくりと、涙を流しながら、お楊が頷いた。
巾着からハンケチを取り出して、目頭を押さえてから、思い出すように、ぽつりぽつりと、口を開く。

「あの日は、店もそんなに忙しくなくて。それで、朝から旦那様が川田屋に使いを出していたんです。お見合いの話を進める為だろうって、皆も、自分の事みたいにそわそわしていて」

そうして、昼食を取りながら話をしようと、多岐衛門が達之介を自宅に招いた。

「お静ちゃんは、それでも普段と変わらずに仕事をしていたのです」
普通なら、自分の見合いが進められている状況で、落ち着きはしないだろう。まして、好いた相手との見合いなのだから、仕事に手が付かなかったり、落ち着きが無くなっても良さそうなものだが、お静という娘は、本当に良く出来た娘だったらしい。

「それで、お店に達之介がやって来て・・・」
一旦言葉を切ると、また溢れ出した涙を、お楊は懸命に堪えている様だった。

「無理をしなくても、良いですよ」

壮太が氣を使ったが、お楊はぺこりと頭を下げて、にっこりと笑った。

「大丈夫です。ごめんなさいね？」

そう言つて、自分の隣でまだ泣いている禎子の頭を撫でる。

「ご、ごめ、なさっ・・・」

「良いのよ。禎子ちゃんだって、辛いのよね」

お楊自身、禎子の頭を撫でる事で、落ち着こうとしているようだった。

「ここから先は、上手く話せるかどうか、私にも分からないのですけれど」

そう前置いて、お楊は再び話し始めた。

「川田屋の達之介が、店に顔を出したのは、予定より少し早い時間でした。それでも、旦那様は快く達之介を迎えて、母屋へ通そうとしたのです。その際に、達之介が、我が家に迎え入れるかもしれない嫁の顔を見たいと言って、笑ったのです」

そこで、名前だけで、まだ顔もお互いに知らないのだからと、多岐衛門が思い立ち、お静はお客の評判も良くて、良く気の付く働きの良い娘で、丁度良いと説明をすると、達之介も満足そうにしていたのだという。

「それで、旦那様も気が緩んだのでしょう。お静ちゃんを呼んで、達之介に会わせただのです」

多岐衛門は、相手が紋二郎だと知っていただろうから、もしかしたら、二人が店で話しているのを見ていたのかもしれない。二人の様子から、上手く行くと踏んでいたのかもしれない。それに加え、達之介の満足そうな顔に、安心もしたのだろう。

そもそも、茜屋が、可愛がつている使用人の嫁入り先を探しているという話を聞きつけて、見合い話を持ち込んだのは、川田屋だった。

「旦那様も、まさかあんな事になるなんて、思いもしなかったので

しょうね」

お静の顔を見るなり、川田屋は茜屋を罵り、お静を醜女と罵った。「期待させておいて裏切ったのだの、こんな醜女にうちの従業員は勿体無いだの、顔を見て人を選んでいいのかだの、それは酷い罵倒を浴びせられて・・・本当に醜いのはいったいどちらだと言うのでしょうかね」

堪らなくなつて飛び出したお静を、店の丁稚に後を追わせ、多岐衛門は達之介を怒鳴りつけて追い出した。塩を店に撒くように言いつけて、多岐衛門自身も、お静の後を追ったが見失ってしまった。暫くして、お静の後を追わせた丁稚が、青い顔をして店に飛び込んできた。

「小さな子供に、後を追わせたのが間違いだつたと、旦那様は悔やんでいらつしゃつて、奥様も、ずっと泣いたままで、今は床に臥せつておられます」

川に飛び込むお静を、丁稚では止める事もできず、走つて店に助けを求めて来たのだつたが、店の男衆が駆けつけた時には既に彼女の体は流された後で、警察と総出で川底をさらつた。

やがて、あの枝垂桜の下に流れ着いたお静の体が発見される。

震える声でお楊が話し終えると、店の中はしんと静まり返つた。

再び聞こえ出した、禎子の鳴咽だけが、妙に響いた。

「その後は、知つての通り、旦那様は全力で川田屋を潰しにかかりました。本当にお静ちゃんを可愛がっていましたが、気が納まらなかつたのでしょう」

元々、紋二郎人気でもつていた様な店だ。

周りをつつけば、転がるように倒産して行つた。

「お葬式には、あの子がお見合いの時に着る予定だつた着物を着せて、最後の別れを惜しんだのですよ」

また涙を拭い始めたお楊の言葉に、壮太は気になって問いかけた。「着物つて、どんな着物です？」

「落ち着いた臙脂の、ぼかしの入つた、染めの綺麗な着物でした」

それは、壮太が描いたお静の着ていた着物、そのものではないか。
「そうですか」

亡くなった時に着ていた着物ではなく、魂のみの存在となって尚、
見合いに着て行く筈だった着物を着ていたのだ。

お静が、どれだけ紋二郎を好いていたか、どれだけ見合いを心待ちにしていたかが分かるような気がして、壮太は、生前に会った事のないお静という少女の儚さに、やるせなさを感じた。

「紋二郎ですが、今はどうしているのか、分かりませんか？」

彼は、相手がお静だと知っていたのだろうか。

そんな疑問から、壮太は紋二郎のその後が気になった。

もちろん、川田屋から見た事の騒動も調べなければならなかった事もあるが、紋二郎の協力を得られれば、お静を文吉から引き離して、在るべき場所に成仏させる事ができるかもしれない。

「紋二郎さんは、人気の染物職人だったから、どこかに引き抜かれているのかも」

「でも、多岐衛門さんが怖くて、どこも引き取らないかもしれないねえ」

楨子と凜が、首を捻る。

「紋二郎さんなら、うちの店の取引先にいます」

意外な事を、お楊が口にした。

「うちの旦那様が懲らしめたかったのは、川田屋の達之介だけで、あの店で働いていた従業員に罪は無いわけですし。何人かは、うちの店で働いていますよ」

川田屋が倒産した後、多岐衛門は川田屋の従業員の再就職先を手配してやったのだと言う。

「へえ。それはまた、天晴れだねえ」

凜が感心して、にんまりと笑った。

「茜屋の旦那さんは漢だねえ。お楊ちゃん、良い店で働いているじゃないの」

「はい。円屋さんの所ほどではありませんけれど」

自分の職場を褒められて、お楊は少しだけ笑った。

「たいしたお人ですね。多岐衛門さんて。うちもご贔屓にさせて貰っています、成程」

茜屋は、円屋とも取引をしているので名前は知っているし、手を抜かない仕事をするから信用が出来ると、父の彦衛門が言っていたのを思い出す。

「それで、紋二郎のいるお店とは、どちらで？」

「うちの店で染物を買付けにしているのですけれど、町田染物店です」

「え？町田ですか？」

「ご存知で？」

知っている店の名前が出て、壮太は驚いた。

町田染物店といえば、円屋も贔屓にしている店だ。

町田の親父といえば、型染めを得意とする染め職人で、江戸小紋の細かな模様といったら、見事としか言いようがない。

他にも、浴衣や紅型なんかも染めている。

紅型は琉球の染物だが、色柄が気に入ったとかで、専門の染め職人と呼んで、東京でも染められるようにしてしまった。

それらの技術を生かして、絹だけでなく、木綿の風呂敷なども染めており、最近では千代紙にも挑戦していると。

「色々と創作意欲の強い店で、しかもどれもこれも手を抜かないので、うちの親父が気に入ってしまっしね。あの親父さんに気に入られたのなら、余程腕が良いのでしょうね」

それなら、円屋の仕事を理由に様子を探りに行けるかも知れないと、壮太は自分の顎を摘んで考えた。

「……壮太さんは、何故そこまでお静ちゃんの事を気にかけるの？」

じつと、禎子が壮太を見詰める。

絹と木綿とはいえ、同じ織物の問屋であるので、お静の事を知っていて気になっているのかと思ったが、壮太はあまりお静の事を知っているように見えない。では、何故見合い相手の行方まで気にし

ているのか。

「ああ、気を悪くしないで下さいね？」

壮太は、にっこりと微笑んで見せて、一つ前置きをする。

ここで、お静の幽霊が円屋の丁稚に取り付いていて、死神が魂をあの世に連れて行けないので困っているなどと、阿呆みたいな本当の話をするわけにもいかない。

「個人的な興味、と言えばそうなんですけれど。川の畔の枝垂桜があるでしょう？あの桜の傍に行くと、うちの艶子が、ああ、黒猫なのですけれどね。この猫が、妙に鳴くのですよ。ホラ、動物って、色々なものに敏感だと言うじゃありませんか」

申し訳無さそうに、壮太は俯きながら一息に喋りたてる。

「ちようど、お静さんの件があつてから、そういう行動をするようになったので、気になりましたね」

ちらりと三人の様子を伺えば、何か察しているのか、凜は反応を示さず、お楊と禎子は驚いた顔をして、お互いの顔を見やっていた。「お静ちゃんは、成仏していないのでしょうか？」

「その可能性は否定できませんけれど。何せ、あんな亡くなり方をしていますから」

再び泣きそうになる二人に、壮太はやんわりと言い聞かせた。

「いや、そういうわけでは。俺がちょっと気になっただけで。実際、調べてみたら鼠が住み着いていましたね？大方、それで鳴いていたのだと思うのですよ。でも、お静さんの事も気になって調べていましたから、そうなったらもう、最後まで調べないと気が済まなくなつたと言うのでしょうか」

あくまで、個人的な興味と言うのでしょうかね？などと、にっこりと笑って言ってやれば、お楊も禎子も、ほっとした様子だった。女性に泣かれるのは、あまり好きではない。

好きな奴がいたら、それは変態だろう。壮太は変態ではないので、普通に女性の涙には弱かったから、なんとなくだが誤魔化した。

それでも、自殺してしまった人の魂魄が、そうそう簡単に成仏す

るのかと言えば、甚だ疑問だ。

「そうですか。見ず知らずの壮太さんに、気に掛けていただいて。私も、気になってはいるのですけれど。旦那様は気丈にしておられますけれど、奥様がそれはもう、衰弱しきっておいでで。あの子が、茜屋で働いていて、幸せだったのかどうか、とても気に病んでいらつしやって・・・」

そう言って、お楊は巾着からメモと万年筆を取り出すと、さらさらと流れるような綺麗な文字を綴った。

「茜屋の電話番号と、住所です。壮太さんなら、ご自分のお店で調べになれば分かるかとも思いましたが、お知らせしておいたほうが、お手間が省けますでしょう？」

丁寧な折りたたんで、壮太に渡す。

「出来たら、あの子の事で何か分かれば、教えて欲しいのです」

「わかりました。何か、お静さんの事で分かるような事がありましたら、ご連絡させていただきます」

壮太も、それを懐へ丁寧な仕舞い込んだ。

「あの、できれば、あたしにも・・・」

おずおずと、禎子が申し出る。

「禎子ちゃんも、気になるものね。壮太さんから連絡が来たら、すぐに禎子ちゃんに連絡をするわ」

お楊が、禎子の頭を撫でて、微笑んだ。

「うん」

その微笑に安心したのだろう。禎子は大人しく頷くと、シベリアケーキの最後の一欠けらを口に入れた。

くうん

店先から、灯子の声が聞こえた。

「おや。灯子が呼んでいるようですので、俺はここで失礼しますよ」
かたん、と、席を立つと、凜がくすくすと笑った。

「なんです？」

「いや。何でもないよ。ここはお前様の驕りだろう？」

立ち上がった壮太に対し、凜の上目遣いの笑顔は実に艶やかだが、相も変わらず、壮太はびくもしない。

「もちろんですよ。皆さんには、お辛いのになと教えていただいで、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げて、顔を上げながら微笑めば、お楊も禎子も、ぽうつと頬を染めた。

「これから町田屋に？」

「ええ。灯子の散歩がてら」

凜の、面白そうに聞いてくるのに、正直に答えて、もう一度頭を下げると、壮太は全員分の会計を済ませて店を出た。

そっと、足元に擦り寄った灯子を、気にかけるように撫でてやると、溜息一つ吐き出して、壮太は一葉庵を後にした。

紋二郎とお静

「おかーえりー」

自分の部屋へ帰れば、艶子が全身真っ黒な少女の姿で、間延びした挨拶を寄越した。

「どうかした？」

「どうもこうもないわ。ぴったりくっついて離れる気配が全くないから、見ていても仕方がないなあって思っただけ」

縁側で足をぶらぶらさせて、機嫌が悪い。

「あら。灯子もお帰りなさい」

壮太の足元で、ちょこんと座って抗議の声を上げる灯子にも、艶子がのんびりと挨拶をした。

「まあまあ、灯子もこっちに座りなさいよ」

ぺちぺちと、自分の隣の床を叩く艶子に、灯子は困ったような顔をする。

「艶子。あまり灯子を苛めないでくれ」

壮太が、艶子が叩いた床と、逆側に腰を下ろした。

灯子はその壮太の足元の、縁側の下に潜り込んだ。

「灯子のけち」

「何がけちなのだ。よっぽど暇だったみたいだね」

機嫌の直らない艶子の頭を撫でて、壮太はひとつ、溜息をついた。

「あら。壮太が溜息なんて珍しいわね」

「うん。お静さんの話を聞くことが出来ただけだね」

お楊と楨子から聞き出したお静のひととなりと、入水自殺するまでの経緯と、彼女が見合い相手に、こっそりと恋をしていた事などを、簡単に説明する。

「恋、してたのかあ」

「らしいねえ」

「・・・・・・」

「・・・・・・・・」

くうん

お互い、思う事があるのか口をつぐんでしまえば、灯子が心配そうに鳴いた。

「それで？」

「そうだねえ。どうしようかと思ったんだけども」

壮太にしては、先程から齒切れが悪い。

「行って来ちゃった」

にっこりと微笑みながら、主語を抜いた科白を吐いてこちらを見る。

「行って来たって、何処へ？」

胡乱氣に睨めば。

「町田屋」

腕組みをして、壮太はへらりと笑った。

「・・・・・・・・で？」

壮太が何か目論んでいるらしい事はなんとなく分かったので、先を促してみる事にする。

艶子が、自分の話を聴く体勢になった事に満足して、壮太は腕組みをしたまま、庭に咲く福寿草の黄色に視線を移した。

「町田屋の親父さんには、俺も時々世話になっているからね。初めはうちの店の仕事を持って行って、探ろうかと思ったのだけれど。理由を話して、見合い相手だった紋二郎に会わせて貰った」

川田屋に居た職人を、何人か引き取っていると言う町田屋の主人は、吉治と言う。

商売敵同士、川田屋の話は良く耳にしていたらしい。あんな店で良く働いていたものだ、と、しきりに呟いていた。

彼の、硬い職人氣質の癖に、情に脆い所は、下町の人間らしかった。

「理由って、どう話したのよ」

「適当に？お静さんの事を知りたがっている茜屋の女中に頼まれた

って言ったただだよ」

「まあ、そのままと言ったらそのままよね」
別に嘘は言っていない。

吉治も、お楊の名を出したら納得してくれたようだった。

「それでさ、ちょっとびっくりしたのだけど」

ぽりぽりと、自分の髪の毛の結び目辺りを軽く引っかけば、爪に髪の毛が絡まって、数本結び目から髪が解けた。

「あ」

それが気になって、結び直そうとする壮太にイラついて、艶子は壮太の腕を掴んだ。

「話の要点で気を反らすのは止めてくれないかしら？」

「ああ、ごめん。それでね」

誤りつつも、結局髪を結び直す壮太は、話を勿体つけているように思えた。

「どう言ったら良いのか」

「どうもこうもないわ。そのままズバリと言っちゃいなさいよ」

腕を組んで首を傾げ、少々考え込む仕草を始めた壮太の膝を、ベしりと艶子は叩いた。

これで、猫の姿のままであったら、確実に噛み付いているところだ。

「僕の思い違いでなければ、お静さんと紋二郎は、どうも両想いだっただけだよ」

「・・・・・・は？」

ここで恋愛事に話が向くとは思ってもいなかったもので、艶子は大きな眼をまん丸にした。

「艶子、猫みたいになっているよ」

「みたいじゃなくて猫なのだから気にしなくても良いのよ！それよりも！」

両想いだったのなら、なにも川に飛び込む必要はなかったのではないのか。

「そうしたら、あたしの仕事も減って、今頃壮太なんかの所にいないのに！」

「こら。なんかって何だよ。なんかって」

頭を抱えた艶子の言葉に、軽く抗議する。
くう

灯子が、縁側の下から顔を出して、唸る艶子を見やった。

「艶子。灯子に心配されているよ？」

「灯子は良い子だから」

それは灯子が心配するのは当然の事だと言っているのだろうか、
壮太が思考を脱線させた頃。

「両想いだって確証を得たのはどうしてよ」

艶子が正気に戻って壮太を睨んだ。

「取り憑かれた以上、あんたの絵で縫い付けておけないのだから、
ちゃんと責任取ってくれるのよね？」

「ええ？それは俺の所為なの？」

確かに、描きつけている最中で、完全に縫い止めてしまう前に、
自分の店の丁稚に、迂闊にも取り憑かれてしまったのは事実だし、
人に取り憑いた靈魂は、取り憑いた人間の靈魂と触れ合っている以
上、絵に描き止めてしまえば取り憑かれた人間ごと縫い付けてしま
うので、艶子の死神の刃と同様、壮太の絵は役に立たない。

しかし、どちらかと言えば自分は趣味で絵を描いていただけで、
それを勝手に利用したいと言って来たのは「あの世」の方々なのだ。
言いがかりの様な気がしなくもない。

「そりゃあ、閻魔様には、仕事としてお願いはされたけれどさ」

「生きた人間の癖に閻魔様からお約束を頂いている壮太が変なのよ。
ちゃんとそれなりの報酬は貰っているのだから、仕事は仕事として
きちんとしてくれるのかって言っているのよ」

「……………報酬は貰っていないよ。後払いだもの」

艶子は、閻魔が壮太に約束した報酬が何なのかは知らない。知ら
ないが、後払いであろうが何であろうが、あの閻魔と交わした約束

なのだから、守ってもらわない事には死神の面子と言うものがある。
「大体、俺の力なんかなくなつて、死神は困らないだろう？」

「困るからあんたと組んでいるのよ」

死神が、浮遊している成仏できない靈魂、つまり幽霊を狩り集めて彼岸へ連れて行き、成仏させているのだが、地上のあちらこちらを浮遊されるので手に負えない。

飢饉や戦がある地域の死神は、それこそ不眠不休で動き回る。

体力と言うものを元来持たないので、疲れる、ということはないのだが、それにしたって限界と言うものがある。精神的に。

下手をすると植物や岩石などの自然物と同化しているふざけた様な者もいれば、生きている側の人間や自然界に害をなす悪霊になつてしまう場合もあり、死神の仕事というものは、それはそれは目まぐるしい。

そこで、壮太の「見える目」と、絵にして「縫い止めてしまう力」は重宝できるのだ。

「朝も言っただけれど、幽霊にうろつかれるより良いのよ。居場所が特定できて、さっさと狩れるのだから、楽な事この上ないわ」

未練があつてこの世に残っている靈魂は、成仏したくないと死神に襲い掛かる場合も多い。

勿論、高々人間の魂の成れの果てである彼らが、神である死神達に勝てるはずもないのだけれど。

「俺の力なんか、微々たるものだと思うのだけれどな」

「それでも、無いよりはマシなの。でなければ、わざわざ冥府の王が、人間に会いになんか来ないわよ」

それもそうかと思ひ直し、壮太はほんと、手を叩く。

「ま、確かに今回みたいな事になったら、只、幽霊を狩るっていうわけには行かないのだろうしね」

「分かつてくれたのなら有り難いわ。一応、言っておくけれど、壮太みたいな幽霊案内人は世界中にいるのよ？」

「へえ？俺みたいなのを幽霊案内人っていうの？」

世界中に自分のようなのがいる事に驚くかと思えば、聴く所は其処か。

艶子は先程からの不毛な会話に、少々目眩を起こした。

「そりゃあ、俺以外にも、見える奴っていうのはいるだろうなと思っ
ていたし、子供の頃、気を使ってくれた父さんが、そういう人の
所に連れて行ってくれた事もあったからね」

そこで、閻魔との縁が出来たのだと、壮太が言った。

「そうなの。へえ。まあ、冥途の入り口まで幽霊を案内、もしくは
死神を幽霊のところまで案内するから、幽霊案内人なのだけれど」
その説明で言えば、壮太は後者になる。

「なんだ。知っていたの」

ふい、と、そっぽを向いた艶子の顔を、上から覗き込む。

「俺がこの見える目のことを、気にしていると思っていた？」

「別に？」

壮太の視線を避けるように、艶子は勢いをつけて、縁側から地面
へ飛び降りた。

「今心配しているのは、お静の幽霊が、大人しくあたしに狩られて
くれるかどうかで事だけよ。壮太なんか心配事のしの字にも入ら
ないわ」

「そう？」

背後で、微笑んでいる壮太の気配に、艶子はなんだか無性に腹が
立ってきた。

ひょいと黒猫に姿を変えて、尻尾でぱたぱたと地面を叩けば、舞
い上がった土煙が壮太を直撃する。

「うわ、目に入った！」

「いい気味だわ」

ささやかな仕返しが成功した事に満足して、艶子は猫の姿のまま、
壮太の膝の上にどかりと腰を下ろした。

「重いよ」

「煩いわね」

のいてくれる様子は無いので、壮太は諦める。仕方なしに、心配そうに縁側の下から出てきて、足元にちょこんと座る灯子の頭を撫でた。

「それで？ 両想いの癖に、こんな事になったのは擦れ違い？」

ようやく反れた話を本筋に戻して、艶子は尻尾をぴんと立てた。

「擦れ違いと言うのか、紋二郎は彼女が亡くなるまで、相手がお静だと知らなかったらしいね」

「あら。それは気の毒」

川田屋の主人、達二郎の段々冷たくなる態度に、店を継げるだなどと、大それたことは思ってもいなかったらしい。ただ、いつか認めてもらえるようにと、修行に励み、商品開発にも力を注いだ。

それが、余計に達二郎の機嫌を損ねている事には、うすうす気が付いていた。それが決定打となったのが、分店の話が出た時だったという。

「彼は彼なりに、川田屋を盛り立てようとしていたのだねえ」

分店の店主になれと言われ、厄介払いをされるのだと落ち込んでいた時に、随分とお静に励まされたのだと言う。

前々から茜屋に出入りしていて、お静の存在は知っていたらしく、良く働く上に、着ている着物や持っているものの趣味の良い事には気がついていて。たまに、女性客からの注文が入れば、色柄の相談にも乗って貰うような、それくらいお静の趣味は良かった。

それが、分店を持つに当たって女房を持てと言われ、紋二郎はようやく、自分の気持ちに気が付いた。

「商売相手の店の、従業員に恋をしたなんて事が達二郎にばれたら、きっと邪魔をされるに違いないと、誰にも言わずにいたらしいよ」

見合い相手の店が想い人のいる店と聞いた時は、内心、色々と穏やかではなかったが、もし見合いをして、お静だったら引き受けたし、そうでなければ断るつもりで、紋二郎は見合いの日を心待ちにしていたのだ。

「若いって良いねえ」

「あんただって充分に若いでしょうが。その科白はあたしの科白よ」
縁側に座り、足元に犬、膝の上に猫と、良く考えたら非常に年寄りくさい状況で、非常に年齢にふさわしくない呟きを、壮太がもらす。

「まあ、それであの騒動が起きて、暫くはかなり落ち込んでいたそうだけれど、町田の親父さんに渴を入れられて、今はお静さんの供養にって、四十九日の供え物を染めているらしいよ」

「四十九日に染物のお供えって聞いた事がないわ」

「まあ、彼なりの気持ちだろうからね」

自分との見合いだと聞いて嫌で自殺したのかと思い悩み、そうではないと知ってからは何故自分の想いをお静へ告げずにいたのかと思ひ悩み。

どれだけの後悔をしたところで、結局、覆水は盆に返らないのである。

なら、あの世にいるであろう彼女に、精一杯の想いを込めて、絹の着物を染め上げるのだそうだ。

「見せてもらったけど、友禅でも絞りでもなくて、刷毛で染めただけで、あんなに綺麗なぼかしができるのだって、初めて知ったよ。きっと、とても綺麗な着物になるだろうね」

思い出してでもいるのだろう、壮太が呆けた顔で、遠くを見詰めている。

「・・・・・・・・あら？」

ふと、艶子が首をかしげた。

「・・・・・・・・ぼかし？」

確か、お静の幽霊が着ていたのも、ぼかしの着物ではなかったか。「そう。あのお静の臙脂の着物。紋二郎が染めた物だそうだよ。ぼかしは、彼の十八番なのだそうで」

好いた相手との見合いに、その相手が染めた赤い着物を着て。

「・・・・・・・・女心ねえ」

「純愛だよねえ」

お静という女性が、どれだけ紋二郎という染物職人を好いていたかが分かるようで、艶子はなんとなく、お静が自殺した理由が分かったように思えた。

「馬鹿よねえ」

残された人々が、どんなに嘆き悲しむかも考えず。

紋二郎の事しか見えていなかったのに、紋二郎の気持ちには気付いていなかったのだ。

だから、紋二郎の父親代わりである達二郎に、己を否定された事により、もう、紋二郎と結ばれることは無いと絶望したのだろう。

まして、気にしていた顔貌を酷く言われたのなら尚の事。

「馬鹿ばかりねえ、人間って」

「馬鹿ばかりなのは認めるけど、繰り返して言われると傷付くなあ」

「あんただって馬鹿なんだから、肝に銘じておきなさいよ。何度でも言ってあげるから」

「うわあ」

冷めた視線を送られて、壮太はわざとらしく胸に手を当てた。

「まあ、大方は分かったわ。で、紋二郎に何て言ったのよ？」

「うん。まあ、うちの丁稚に君の想い人が取り憑いているとは流石に言えないでしょう？」

それはそうだ。

艶子はもそもそと、壮太の膝の上で箱を組んで座り直す。胸の下に両前足を仕舞い込む、あの猫独特の座り方だ。

春先の夕暮れ時は冷える。

「まあ、とにかく文吉と紋二郎を会わせてみようと思ってね」
「会わせてどうするのよ？」

紋二郎は、文吉にお静がくつついている事など知る由もないのに、会わせて意味があるのかどうか。

「紋二郎には分からないかもしれないけれど、お静さんには、分かるだろう？」

幽霊になつても、お静はお静だ。

恋焦がれた相手が目の前に現れたら、どうなるか。

「それで、明日にでも仕事が終わったら、頼みたい染物があるから店に来てくれて頼んでおいた」

につこりと、壮太は何を考えているやら分らない笑みを浮かべた。

「顔を貶されて死んだ女が、慕っていた男の前に現れるなんて事は無いと思うのだけれど」

呆れ半分に首を傾げる艶子を、箱を組んだままの体勢で持ち上げて、壮太は縁側から、よいしょ、という掛け声と一緒に立ち上がる。

「灯子もおいで」

灯子が部屋に入るのを確認して中に入ると、ランプをつけるにはまだ早いので、火鉢に火を入れて、障子戸を閉めた。

艶子は座布団の上に降ろされた。

「座布団が冷えているわ」

「文句は言わないでよ。流石に外は寒くなってきたからね」

寄り添って来る灯子と火鉢で暖を取りながら、壮太は火鉢の上に網を置いて、傍にあった木箱から、取って置きの干し芋を出して焼き始めた。

「もう少しで晩御飯でしょう？」

「でも、小腹が空いたからね」

暫くすれば、薩摩芋の甘いにおいが部屋に行き渡る。同時に、部屋の温度も、随分と温まったようだった。

「明日、紋二郎が来て、文吉と会わせるのは分かったけれど、それでお静がどういう行動を取るかは不明よね」

焼けて丸まり始めた芋を見詰めて、艶子は不満そうだ。

「驚いて文吉から離れてくれれば良し。紋二郎に鞍替えしようというなら、その瞬間はチャンスだし、彼女が物凄く大人しい女性で、恥ずかしがって身動きをせず、文吉から離れてくれないようなら、それはそれで、紋二郎に任せるさ」

「・・・」

紋二郎に、何を任せるのか。彼は見えない類の人間であるのに。

「人の思いは、時に神様の予想をはるかに上回るものだよ」

にっこりと、預言者のようにのたまって、壮太は干し芋を旨そうに口に運んだ。

円屋の兄弟（前書き）

お待たせいたしました。本当にすみません（一一；）
ちよつとありまして。掲載が遅れました。

円屋の兄弟

「今日は、朝からおかしいのです」

着物の裾を文吉に掴まれて、次郎太はつんのめった。

「これ。急に掴むものではないよ」

「あっ、済みません」

振り向けば、顔を真っ赤にして、文吉がぱっと着物から手を離れた。

夕暮れ時。そろそろ兄の壮太を迎えに行かないと、またぞろあの部屋代わりの離れで、餅だの干し芋だのを食べて、夕食を済ませてしまふだろうと、店の片付けが終わるのを見計らって、庭へ出ようとしたところだった。

「どうかしたのかい？」

兄の事は、父か母か、若しくはおみよあたりが呼んで来るだろうと決め付けて、次郎太は文吉の目線に自分のそれを合わせた。

「あの、朝から、おれ、変なものが見えるのです」

「変なもの？」

文吉が、使いから帰ってずっと、落ち着きが無かったのを思い出す。

「何だい？言ってごらん」

眉間に皺を寄せて、今にも泣き出しそうな文吉を落ち着かせようと、次郎太は勤めてにつこりと、優しく聞いた。

変なものの類は、大概自分の兄が見つけて絵に描くか、眉間に皺を寄せて嫌そうな顔で通り過ぎるかなのだが、その兄と同じものが、この子供にも見えてしまっているのだろうか、少し不安になった。

「赤い、臙脂色の着物だと思ふんです」

「着物？」

こくりと頷いてから、きよろきよると、辺りを見回した。

「大丈夫だよ。誰もいないよ？」

ここは店の裏にある庭の一角で、兄を呼びに行こうと出たばかりの、家族用の玄関の脇だった。

使用人たちは、ここから少し離れた台所の傍にある使用人用の玄関を使うので、このあたりにはあまり近寄らない。

古い家なので、格式ばった作りをしている円屋だが、彦衛門や彰子、もちろん次郎太と壮太の四人は、そういった古い格式には余りこだわらなかった。

が、玄関だけは、使用人達と同じ玄関を使うと、下駄や草履が行方不明になったりするので、家人用の小さな厳つい玄関を利用してゐる。履物は似たり寄ったりになってしまふので、良く間違えて履いて行かれてしまふのらしい。

それは従業員達も自覚しているのだが、それでも良くお互いの履物を間違える。それがなかなか直らないので、終いには彦衛門が大工を呼んで、玄関に大きな下駄箱を作ったくらいだった。

ちなみに、滅多に開かれることは無いので、普段は壁と化しているのだが、この家には偉い人が来た時用の玄関もあり、玄関だけで三つあった。

「朝、お使いから帰って来てから、良く臙脂の着物の端を、見るような気がするのです」

誰も来ない事が分かって安心したのか、ぼつりぼつりと、文吉は俯きながら、自分の身の上に起こっている、些細ではあるけれども奇怪な出来事を話し始めた。

「目端に、臙脂色の着物の裾というか、袖というか。ちらちら見えるような気がするのです。始めは、気にもしていなかったのですが、見えたと思って誰が着ているのか分からなくて。おれ、臙脂色の着物を着ている人を探したのですけれど」

臙脂色などと、派手な色を着て仕事をするような従業員は、円屋には居ない。

客商売である以上、客より目立ってはいけないし、祝い事でも有れば、それはまた別の話になって来るが、別に祭りがあるわけでも、

誰かが還暦を迎えるわけでも何でもない。

つまり、今この時期に、臙脂色を着る従業員が居るはずが無いのである。

「臙脂色なんて目立つ色、着ていたらさぞかしうちの店では目立つだろうしね」

まあ、それでも、女性の好む色であることは間違いが無いので、もしかしたら客の中に臙脂を着ていた人物が居て、それを見ていたのではないかとも思ったが、文吉は違うと首を振る。

食堂であつたり帳場であつたり、目撃した場所は、ほとんどが従業員か家の者しか入り込めない場所であるという。

次郎太も、首を傾げて考える。

今日一日、臙脂色の着物や洋服を見ただろうか？

「臙脂色か」

本来であれば、祝い事にも使うめでたい色なのだが。今日は売り物以外で見た記憶が無い。

「皆には、聞いてみたかい？」

「聞きました。誰か着ている人を見なかったかって。でも、そんな奴見ていないって、皆に言われました」

朝から文吉が、なんだか落ち着きが無く、そわそわしていた理由が目端に見えるという臙脂の着物だったことは分かったが、何だか謎が増えた。

「うーん」

ぽりぽりと、次郎太は兄と違ってさっぱりと短くしている頭を、ぽりぽりと掻いた。

原因の手掛かりが分からない。しかもチラチラ見えるだけというのはどういうことか。まるで、狐にからかわれてでもいる様で、まだ十二の文吉には気持ちが悪くて仕方が無いだろう。

「今日は一つ、我慢しなさい」

「えっ？」

驚いた文吉の顔は、今にも泣きそうだ。

「文吉は男の子だろう？」

「それは・・・そうですけど」

「今日はもう、ご飯を食べて、お風呂に入って寝なさい。明日までには、何か良い方法を考えておくし、もしかしたら、臍脂色が気になるのは今日だけで、明日の朝起きたら、見えなくなっているかもしれないだろう？」

言い聞かせながら、安心させるように、次郎太は文吉の頭を撫でてやった。

「・・・わかりました」

「よし、良い子だ。文吉は男だね」

褒めてやると、嬉しそうに笑った。しっかり者とはいえ、やはりまだまだ子供だ。

「ただし、明日になっても見えるなら、直ぐに教える事。いいね？」

「はい」

しっかりと頷くと、夕食が整い始めた食堂へと走って行った。

その文吉の背中を見守りながら、次郎太はまた頭を掻いた。そうして、結局、兄のいる離れへと足を向けたのだった。

「兄さん？」

離れからは、芋の匂い。

やっぱり、この兄は放っておいたら、干し芋だけで夕飯を済ませてしまっていたに違いない。

うわん！

「くんばんは。灯子」

出迎えてくれた白い犬に挨拶をし、呼んでも出てこない兄の部屋の、縁側に上がって、ぽとぽとと障子を叩く。

「兄さん、ご飯だよ」

障子の向こう側が透けるほど、まだ日は落ちていないし、ランプも点けていないのだろう。中を窺う事は出来なかったが、とたとたと、畳の上を歩く猫の足音は聞こえた。

兄は出て来ないつもりなのかと、もう一度呼ぼうと口を開いたところで、ぱん！と、勢い良く障子戸が開いた。

「居るのだったら返事くらいしてよ」

呆れ半分にそう言えば、壮太が眠そうに欠伸をした。

「迂闊にも干し芋を焼いていたら暖かくて眠ってしまつてね。お前の声で起きたんだよ」

なるほど。眠そうな上に、部屋の中を覗けば、火鉢に網が掛けてある。

「焦がさなかった？」

「寝る前に寄せたからな」

伸びをしながら横着に弟へ答えると、庭に在る、昔はお茶専用だった清水の湧き出る岩場から水を汲んで、ばしゃばしゃと顔を洗った。

「ご飯食べるよね？」

手拭で顔を拭く兄を眺めながら問いかければ、うんうん、と、首だけで頷かれた。

「灯子も、美味しいご飯があるからな」

兄の恋人のような愛犬の頭を撫でる。

「こら。灯子に気安く触るな」

「えー。お客さんに撫でられるのは平気なのに、どうして僕はだめなのさ」

「お客さんは良いの。お前は男だし年頃だし」

「もう。そんなに心配しなくたって、灯子は兄さん一筋だろう？僕だって灯子に触りたいもの」

この兄は、男性が灯子に触れると、いつも機嫌が悪くなる。父だけは例外のようだけれど。

「灯子が浮気なんかする訳無いだろ。単に俺が嫌なの」

「はいはい」

分かっていた事なので、次郎太は苦笑して、突き出された手拭を受け取って、自分の肩に引っ掛けた。

「これは洗いにし出ておくから、部屋に戻る時に、新しいのを持て来なよね」

そう言つて笑つて、先に立つて母屋へと歩き出せば、壮太もぺたぺたと後を着いて来た。

「ねえ兄さん」

「うん？」

唐突に話しかけても、ちゃんと返事をしてくれるのが可笑しくて、何となく笑つてしまう。

「何だよ？」

「うん。文吉なんだけれど、どうも様子がおかしくてね」

「……へえ？」

こういうのらりくらりとしたところは、少し腹が立つ。

怪奇現象に至つては、幽霊が見える體質の所為で、壮太は色々詳しい。たまに、幽霊でない変なものまで見ているらしいので、文吉が店の中で見ている臙脂色の着物とやらを、壮太も見えてはいないかと思つて聞くだけのつもりだったのだが。

「兄さん、何か知つているでしょ？」

肩越しに振り向きながら、そのものずばりと決め付けると、壮太はそつぽを向いた。

これは、やはり何か知つていて、隠している事がある。

予想外ではあったものの、これは手っ取り早いと思つたほうが良いのだろう。

「臙脂色の着物の端が、どうも見えたりするらしいのだけど。うちには臙脂なんて色を着て仕事するような人はいないし、お客さんにも、今日は臙脂色を着ていた人はいなかったと思うし」

足を止め、くると体全部で振り向いて、にっこりと笑つて見れば、兄は面倒くさそうに眉間に皺を寄せた。

「まったく、お前は勘が鋭くて困るよ」

「それは褒められていると思つて受け止めておくよ」

ぼりぼりと頭を掻くものだから、兄の髪が盛大に崩れる。

崩れると分かっているけど、この癖は直らないらしい。次郎太も、同じ癖を持っているのだが、壮太は髪をまとめて結っているのだから、気を付ければ良いのにといつも思う。自分はこの癖で、髪を伸ばすのを諦めた。

つい最近まで、曲げを結う時代だった事を考えると、今この時代に生まれて良かったと思う。兄のそれは、その時代の名残だし、自分はこの癖でさっさと諦めてばっさり切ってしまった。

崩れた髪を結び直しながら、壮太はちらりと次郎太を見やる。

「兄さんの目。見えるって言うのは不便だとも思うけれど、結構人助けになっているよね」

兄の描く絵は、幽霊を描いているというのに、生き生きとしている。その所為もあったのか、描かれた幽霊の遺族に見せてやれば、ほとんどが有り難がって持っていく。

描かれている人々が、微笑んでいたりと、怒っていたり、それは表情が豊かで、生きている頃と変わりなく描かれているからだ。

もちろん、それらが亡くなってから描かれたものだというのは、秘密にしているのだけれど。

「死んだところで人の性格は変わらないし、幽霊だからと言って全部が全部、悪霊と言うものでもない」

などと、本人はけろりと言う。

逆に、靈魂だけになってしまったほうが、その人物の本質が出ると言う。

まあ、魂だけの存在になるのだから、それもそうかとも思う。

「幽霊を描くのは、面白いからやっているだけだし」

「はいはい。ご遺族の慰めになっていたって、兄さんは知らん振りだし？時々、絵の中の人物がいなくなっていたって、何にも気にしないものね？」

壮太の描く幽霊の絵の怪奇に、最初に気が付いたのは次郎太だったし、それがあの黒猫が家に出入りするようになってからだと言う事に気が付いたのも、次郎太だった。

「今日は艶子は？先程までいたのでしょうか？」

あの猫がいるということは、何かがあるということだ。

気付いてはいても、次郎太はその事を兄に問い詰めたことは無い。それは、父も母も同じだったし、多分、あの常連客の凜も、そうなのだろう。

それは、壮太も薄々気が付いていた。

「・・・艶子は今お出掛け中だよ」

「文吉のところ？」

にっこりと、わざと顔を覗き込んで言ってやれば、渋面を作られた。それから、諦めたように、盛大な吐息を吐かれる。

「どうも、俺はお前には敵わない気がする」

「それはお互い様です」

今度は、とても嫌そうな顔をされた。

「文吉の見る臍脂色の着物、兄さんとはつくに分かっているのでしょうか？文吉が泣いていましたよ。早く解決してやりたいのですがね」
そこまで言ってやれば、まるで降参したという様に、両手を挙げた。

「分かったよ。文吉が仕事に手が付かないって言うのなら、商売に差支えが出る」

「知っていながら何もいかなかった事は、兄さんなりに調査をしているでしょうから、両親には黙っておいてあげます」

「・・・そういうところも憎たらしいけど、助かるよ」

「どういたしまして？」

うんざりするような壮太に比べ、次郎太は満足そうに微笑んだ。

泣く幽霊もなく

「それで？」

道すがら、簡単にだが、文吉の体験している怪奇現象の説明を聞く。

「文吉に取り憑いているのは、この前、川辺の枝垂桜の下で発見された茜屋のお静で、彼女の着物の端が文吉には見えているって事だよ」

「それは分かりましたが、お静さんが何故年端も行かない文吉なんぞに取り憑くのかな？」

それはもつともな疑問だ。

「朝、俺と会った様な事を、文吉は言わなかったのか？」

「いいえ？ ああ。そういえば、文吉は朝早く使いに出ていましたね。兄さんと会ったのですか？」

何故自分と会った事を言わなかったのかは、壮太が文吉に嫌われているからだろう事は予想がついた。

「ほほう？」

人の悪い笑みを浮かべて、壮太は今度、とことん文吉をからかってやろうと決めた。

「あの枝垂桜の下で、お静を描いていたら、文吉が通りかかったのさ。見るなというのに、画板を覗き込もうとするから困ってね。注意をしてやったら何を思ったのか、文吉の奴、俺の描いたお静を、美人だと言ったんだ。後姿を描いていたのだから、顔なんか見られるはずが無いのに」

壮太は、今度はにっこりと笑った。

「あー、大体ですが、なんとなく分かりました」

茜屋のお静の事は、次郎太も話に聞いている。

醜いと言われて死んでしまったような女性が、子供とはいえ美人と言われて嬉しかったのだろう。それで、文吉にくつついてしまっ

たのか。

「なんとかなりませんかね？」

「なんとかするさ」

そうでなければ、俺が艶子に叱られる、という続きの文句は飲み込んで、壮太は自分の足元に、きちんと着いて来る灯子の頭を撫でた。

「ああ、そうか」

唐突に呟き、兄弟で肩を並べて歩いていた壮太が足を止めた。

「何です？急に止まらないで下さいよ」

数歩前に出てしまった次郎太が、ぱたぱたと戻ってくる。

「唐突に一人で呟いた上に足を止めないで下さい」

何か言いたい事があるのかと、聞こうと思って戻って来たが、それが分かっているのかいないのか、壮太は構わず話を続ける。

「まあ、それで、物は相談なんだが」

「ほんつとうに唐突です兄さんは」

「そうかな？でも唐突に思いつくのだから仕方が無いだろう？」

悪びれもしない壮太に、次郎太も諦める。

「明日、紋二郎にうちへ来いと言ってある」

「それもまた唐突ですね」

次郎太は、笑っていない笑顔を顔に張り付けつつ、唐突三昧にさっさと事を運んでいたらしい兄に、嫌味たっぷりに呟く。

もちろん、効果が無い事は端から承知の上だ。

「それで、紋二郎が来たら、文吉と引き合わせて欲しいのさ」

案の定、呟きは綺麗さっぱり無視された。

「引き合わせるって、何故です？」

「それは、お楽しみ」

満面の笑顔で返されれば、疑いたくなるというものだ。

「何ですか。言えない様な事ですか」

「女心は一途だねっていう事さ」

「訳が分からないのですけれど」

「兎に角、文吉の為でもあるのだし、あの子が俺の言う事なんか聞きやしないのは分かっている事だろう。次郎太にお願いするしかないのだから、頼んだよ」

「勝手に頼まないで下さいよ」

ぽん、と、肩に手を置かれ、勝手に決め付けられた。

それでも、文吉の為と言うのなら、仕方が無いか。

「分かりました。文吉を確保しときましょう。でも兄さん。これは一つ貸しにして置きますからね?」

「はいはい。分かっていますよ」

ひらひらと手を振りながら、今度は壮太が先に立って歩き始めるので、次郎太は、肺から盛大に溜息を吐いて、兄の後を追った。

「灯子は、何でこんなのが良いのだい?」

艶子と同じ事を言って、次郎太は壮太の傍を歩く灯子を困らせるのだった。

その日は、夜明け前から何だか風が強かった。

壮太が、がたがたと風で鳴り止まない障子に起こされたのは、早朝である。

否。

世界がうっすらと白く光り始める朝と夜の間の時間と言った方が良いでしょう。

「灯子は、怖くないかい?」

自分の隣に、丸くなっている白い犬の頭を撫でると、ぺろりと手を舐められた。

「ふうむ。困ったね」

そんなに困った風でもなく、壮太は布団の中から顔だけを出して、きよろきよろと自室を見回した。

部屋の奥の作り棚の上には、艶子の目が光っている。

「確か、今日よね。紋二郎と文吉を引き合わせるの」

「そうだけど?」

苛々したように、艶子が障子戸の向こうを睨む。
くうん

灯子が顔を上げて、障子戸から目線を離そうとしない。

「彼女は、今日の事、知らないはずなのだけれどねえ」

壮太はやれやれ、と言った風に呟いた。

白くなり始めた屋外は、もう直ぐ清浄な空気に満たされ始めるだろう。

「……何か、俺に用事かな？」

上体を起こして、壮太が障子の外へ向けて話し掛けた。

「確かに今は丑三つ時とも言いうからね。君らが動きやすい時間だろうけれど、こんな時間に女性が男の部屋へ訪問とは、感心しないな」
ざわざわと、風で大きく枝を揺らし、庭木の枝は、今にも折れてしまいそうだ。

そう思った瞬間、がたがたと鳴っていた障子戸が、す、と開いて、風が室内を掻き回した。

「不躰だね」

棚に仕舞われていた紙が、ばさばさと宙を舞い、壮太自身も、顔を腕で庇う。起き抜けの髪が乱れるが、そんな事には構ってられない。

ううーっ

灯子が唸り、艶子が少女の姿をとって、壮太を背に、障子戸の前に立つ。

「悪いけど、今貴女を狩り取ってしまったても構わないのだけれど？」

艶子が冷たく言い放つ。

障子の向こう。縁側に立つのは、小さな少年の影と。

「泣く事はないじゃないか」

はらはらと涙を流す、臙脂色の着物を着た年若い、まだ少女と言っても良いだろう、女。

取り憑いた文吉の体を使い、お静がそこに居た。

「どういう事よ？これ」

振り返らずに、布団から上体を起こしたままの壮太に、艶子が問いたです。

「俺に聞いても分からないよ」

彼女がどうして此処に来たのか、何故泣いているのか。何かを訴えたいのだろうけれど、彼女は泣くばかりだ。

「文吉の様子は？」

ふと、取り憑かれている少年の体が気になった。この暴風の中、寝巻きのままだ。

「ふん。ちゃんと草履を履いているし、目は瞑ったままだし。心配しなくても良さそうだけれど？」

眠ったままの文吉を、そのまま連れて来たのらしいが、草履を履かせてくれたのは良かったと、壮太は変なところでほっとする。

この風で、庭の地面は折れた枝や飛び散った何かの破片で、大変危険な事になっているだろう。

「ねえ。泣くだけじゃ分からないよ」

問いかけても、彼女ははらはらと、涙を流すだけだ。

「あれじゃないの？ 壮太が見えるのを知っていて来ているのだと思うのよね」

「まあ、おおよそそうだと思うけれど」

艶子の手の中には、彼女の持つ死神の刃が現れる。

彼女のそれは、すらりと長く反りの少ない、世界で最も美しく、残忍で優しい刃。

日本刀であった。

「久しぶりに見るけど、相変わらず綺麗だね」

「夜目でも利くのかしら。良く分かるわね」

艶子の小さな手に握られたそれは、持ち主と同じで、柄も鍔も、鞘も黒。封印の紐までも、房の先まで真っ黒で、宵闇にまぎれてしまえば所在も分からなくなりそうだ。

「艶子、君は少しせっかちさんだね」

早々に、柄に手をかける死神の少女を、暢気に引き止める。

「せいぜい二十年そこそこしか生きていない若造に、せっかちとか言われたくも無いのだけれど」

「艶子は年いくつ？」

「女性に年齢を聞くものではないのよ？」

肩越しに、可愛く微笑まれた。

目の前の幽霊よりも、母親の彰子よりも、この笑顔は怖い。

すい、と、障子が閉まる。

部屋の中に、お静が入って来たのだ。

風が止み、舞っていた紙が、ばさばさと床に散らかった。

「何よ？」

艶子が身構え、灯子が体を起こし、壮太の前に立つ。

それにも構わず、お静は泣きながら文吉の体ごと進む。

二人と一頭は、全く目に入っていないかのように、ゆっくりと文吉の足は動く。

そしてふいに、文吉の体ではなく、彼女の姿が、しゃがみこんだ。泣きながら、床の上に散らばった一枚の紙の前で、彼女の動きが止まる。

「・・・それ・・・？」

艶子が覗き込めば、見覚えのある絵が、そこに一枚、画板に挟まったまま落ちていた。

「これ、君を描いた時の？」

壮太が布団から抜け出して、画板を拾い上げる。

目線の高さまで掲げてみれば、白み始めた外の明かりにうつすらと浮かぶ、先日の早朝、川野辺で描いた自分の絵。

そこには、花をつけるのを、今か今かと待つ大きな枝垂桜と、その幹に寄り添うように立つ女の後姿が描かれていた筈だった。

今は、枝垂桜の下に、女の姿は無い。変わりに、人型に染め抜いたかのような白。

この人型に描かれていた人物は、今目の前にいる幽霊だ。

「せっかく描いたのに、君が文吉にくっついてなんか行くから、抜

けちゃった絵じゃないか」

それを聞いて、艶子はこういう言いがかりだと思う。

壮太は絵にした靈魂を、絵にした場所に縫い止めてしまう力がある。それは、死神である自分達には有り難いが、縫い止められた方はいい迷惑だろう。

お静は、その絵をじっと見つめた後、壮太の顔を見つめる。

「えっと？」

壮太も、お静と、自分の描いたお静の抜け出た絵とを交互に見やっ
てから、かっくりと、首を横に傾けて、しばし考える。

「もしかして？」

何かを思いついたのか、壮太はじっと、お静の泣き顔を見つめる。

「壮太？」

心配になった艶子が、壮太の背に手を触れた。

「うん。そうか」

にへら、と、急に相貌を崩す壮太に、艶子は飛びのいた。

「気持ち悪いのだけど？」

「ああ、ごめん」

へへ、と、今度は照れたように笑う。

「お静さんさ。俺に自分の絵を描いて欲しいのかな？」

嬉しそうに壮太がお静の顔を覗き込めは、ゆっくりとだが、お静が頷いた。

「やっぱりそうか」

少し興奮気味に喜ぶ、壮太の自惚れた予想は当たったらしい。

「俺が、君の見えるのを、枝垂桜で絵を描いていた時に気が付いたのかい？」

壮太の質問に、またお静が頷いた。

「ずっと川面しか見ていなかったから、俺には気付いていなかった
と思ったけれど」

そう言えば、透けて見えるその両手で、そっと、文吉の肩を掴んだ。

「ああ、それで、気が付いたのか」
何が何やら。

喋らない幽霊、お静と、一人で納得する青年、壮太の間で、
どんと話が進んで行く。
くうん

寂しそうに、壮太の恋人が鳴いた。

「壮太。私と灯子にも分かりやすく話をしてくれるかしら？」

ずい、と、壮太の喉下に、愛刀の鞘尻を突きつける艶子に、流石
に壮太も、お静との会話にならない会話を止めた。

「お静さんは、俺に自分の絵を描いて欲しいのらしい」

「・・・・・・・・何故そうなるのよ」

艶子の眼差しは胡乱気だ。

「俺が枝垂桜の下にいた彼女を描いていたとき、文吉が話しかけて
来た事は話したでしょう？」

じっと、一人と一頭の眼差しを一身に受けながら、冷や汗を流し
て説明を進める。

「その時に、俺が自分の絵を描いている事に気が付いたらしくて。
それで、文吉が俺の絵を見て、お静さんを美人だと言ったのが嬉し
かったそうなんだ」

「まあ、それで今こんなに厄介な事になっているのよね？」

その辺りまでの経緯は、おおよそ予想していた事であるので、今
更肯定されても、事後確認をとっただけの様な。

「あの時は、彼女の顔を描くのは気が引けたのだけれど、お静さん
は、自分の顔を、きちんと描いて欲しいというのさ」

「・・・・・・・・泣き顔で？」

なにせ、彼女はいまだに泣いている。

「笑顔で」

へらりと笑われて、そんなことを言う壮太に、艶子は眩暈を覚え
た気がした。

「絵を描いてやれば、文吉から離れてくれるのかしら？」

一応、聞いてみる。

「さあ、そこまでは？」

聞いた自分が間違っていた。

「灯子。こんな馬鹿は放っておいて、寝るわよ」

わん

灯子は布団の上に丸まり、艶子はさっさと姿を黒猫に変えて、いつもの定位置である棚の上に飛び乗って、大きな欠伸を一つ。

「ちょっと、二人とも。冷たいなあ」

「泣き止んでからほざけて、その幽霊にも言っておいて頂戴」

まったく、何のために閻魔の元にも帰れずに、自分がこうして壮太の傍に居なければならぬのか。その理由を忘れ去ってしまったているような阿呆者は、この際同情する余地も無く放っておこう。

「まずは、そうだね。何でそんなに泣くのかな？」

壮太の声が、明るくなり始めた室内に響く。

清浄な朝の空気に満たされれば、幽霊であるお静の力は弱まるだろう。

「まったく、お人好しで困るわよ」

ぼそりと呟けば、灯子だけが目線で頷いた。

円屋一家

「朝ですよ！ 壮太様！」

突然、ばたん、がたがたと、けたたましい音を発てて障子が勢い良く開く。

眩しい朝日と共に飛び込んで来たのはおみつだった。

「うう、寒い」

がっしりと、灯子の背中に抱きついて起きようもしない壮太の掛け布団を、おみつは乱暴に剥ぎ取った。

「さあさあ、起きて下さい。今日は何だか知りませんが、女将さんが張り切ってご飯を作っていますよ。遅刻してもおみつは責任を取り兼ねます」

困った顔の灯子を、それでも離さない壮太に、堪忍袋の尾を切らしたおみつは、力任せに敷き布団を引き抜く事で、壮太を起こす事に成功する。

背中から敷き布団を斜めに持ち上げられ、慌てた灯子ごと体全部がごろんと畳の上に転がり落ちると、ようやく壮太はむくりと起き上がった。

「はい、手拭です。次郎太様に持って行く様に言われましたので」

おみつは手際良く手拭を円屋の長男坊に手渡し、布団を纏め、灯子の頭を撫でると、嵐のように去って行った。

「うう？」

手拭を持ったまま、呻く壮太の足元を、するりと柔らかな感触がすり抜ける。

おみつが障子を開いたまま出て行ったので、そのまま黒猫が縁側に出て大きな伸びをした。

わん！

ちょこんと傍らに座って、見上げて来る灯子の顔を見下ろし、壮太はようやく、頭がはつきりし始めた。

「ああ。朝か」

「寝惚けるにも程ってものがあるわ」

こちらを見もせず、黒猫から辛辣な科白を浴びせられ、へらりと笑う。

「さて。顔を洗いますか」

固まった手足を伸ばし、縁側から下駄を履いて外に出れば、冷たい綺麗な空気が体を包む。

昨夜の強風の為、庭は燦々たる有様になっているだろうと思ったが、季節は春になりたてで、葉が散るでもなく、実が落ちるでなく少々庭木の細い枝が散らかっているだけで、大した事にはならなかったようだった。

ばしゃばしゃと顔を洗い、身支度を整える。

「あれ？おみつ、何か言っていないかったかな？」

忘れてはならない事を、何か言われていた様な気がして、考え込みながら下駄を履けば、茶屋の入り口の垣根から、草履が飛んで来て、せっかく洗ったばかりの顔に見事ぶち当たった。

「何してんだいこの馬鹿息子！」

怒鳴り込んで来たのは自分の産みの親。

「母さん？」

顔に当たった草履を手に持ちながら、呆然と呟けば、とっくに門をくぐった彰子に耳を摘まれた。

そうだった。おみつは「女将さんが朝ご飯を作っている」と言わなかったか？

思い出しても既に遅い。

「返しな！」

耳を掴んだまま、彰子は器用に息子から奪い返した草履を履く。

「まったく、せっかくおみつを呼びにやったのに、見に来ればようやく下駄履いてそのまま固まっているとは余裕じゃないか」

母は耳を引っ張ったまま、息子を母屋へ連行する。

「母さん母さん、痛い、耳が痛い」

「痛い様になっているのだから、当然だろう?!」

その二人の後を、灯子がおろおろと着いて行く。

「ああ、灯子。心配おしでないよ。ちようっと懲らしめて、朝飯を食うだけだから」

につこりと、彰子に微笑まれては、灯子も引き下がるしかない。

足を止めれば、壮太を引き摺ったまま、彰子が振り返った。

「何してんだい? 灯子にも美味しいご飯があるのだから、あの黒猫と一緒に着いておいで」

一瞬、きよんとした灯子だったが、後ろを振り向けば、艶子が居た。

わん

艶子に、文字通り一声掛ければ、走り寄って来る。

灯子は艶子が苦手だが、嫌いではない。

この世ならぬモノに反応してしまうのは、本能なのだから仕方がない。

「おや。姉妹みたいで良いじゃないか」

彰子に優しく微笑まれ、灯子はまだ母親に耳を引っ張られている壮太を見やった。

・・・泣きそうな顔だった。

「さて、今朝は風が強くて目が覚めちゃったからね。ついでに色々作ったのさ」

食卓に着けば、住み込みの従業員達は既に食べ始めていた。その横を、耳を引っ張られながら通り過ぎる。

「母さん。申し訳なかったから、耳を離してくれないか?」

「やなこった」

無下に断られる。

「ああ、マッ! この子らに朝飯やつくれ!」

土間から上がる前に、彰子は家の中に入れない灯子のために、特製の朝食を出すように指示を出してくれる。灯子は心配そうにこちらを見ていたが、持って来られた朝食に気が付くと、つい尻尾を振

ってしまっていた。

後は艶子と並んで、白いご飯の上に焼き魚とカツ節と、ほろほろに炒られた卵が乗った、芋汁のかけられた贅沢な朝食を、喜んで食べるのだった。

「うう、灯子お・・・」

情けない声を出した壮太だったが、灯子は別に悪くはないので、ちよつと涙を流してしまうくらい耳が痛くても、どうしようもないのだった。

家族での食卓に着いて、ようやく耳を離してもらえたが、じんじんと熱く疼いて、しばらくは触れそうにない。

次郎太が、笑いを堪え切れず、自分とは違った涙を零しているのを、彰子にばれない様に、こっそりと睨んだ。

「さて、ようやく家族が揃った事だし、頂こうかね」

妻と長男が座った所で、彦衛門が、両手を合わせた。全員がそれに習う。

「頂きます」

「」「頂きます」」

一斉に、食事の挨拶を交わす。

おみつの言葉通り、本日の朝食は贅沢だ。

朝から芋汁には鶏肉が入っていたし、焼き魚にお新香はもちろん、緑黄色野菜に卵を絡めて炒めた物、蕪の田楽と、さっぱりはしているものの、朝からこの量を食べ切れるだろうか。

「ああそうだ。兄さん」

「何？」

蕪に箸をつけて割りながら、次郎太が話し掛けて来る。

「昨日話した染物屋だけど、今朝方お使いの子が来てね」

昨日話した染物屋といえば、お静の見合い相手になる筈だった紋二郎が居る町田屋しかないので、壮太は魚を頬張ったまま、顔を上げて次郎太を見やった。

「どうも、とつと話を進めたい様で、朝食が済んだらこちらに向

かうそうだよ」

口の中の物を飲み込んで、お茶で胃の腑へ流す。

「それはまた・・・」

随分と行動が早い。

「例の職人が落ち着かなくなつて困ってしまったらしくてね。兄さんも、さっさとご飯食べて、準備したら良いと思うよ」

「分かった」

兄弟のやり取りに、彰子は目を丸くした。

「染物屋って、壮太お前、何やらかしたんだね？」

「やらかしたって・・・、母さん」

今度はその母子のやり取りに、次男坊と父親が笑い出す。

「彰子、壮太が染物相手に何をやらかすっていうんだ。相手は職人と言つたじゃないか。女の子でなければ、早々問題は無いだろうよ」

「そうだよ。女性問題で揉め事を起こすのは兄さんの得意だけれどね。絵付けに使う顔料が欲しいのでしょ？兄さん」

笑いながら涙目であるが、それでも次郎太は壮太の味方だった。

さり気なく、本来の目的を誤魔化してくれる。

「いやいや、女性問題って。俺がいつ、そんなに女遊びをしたんだよ」

ここぞとばかり、壮太は話題をずらしたつもりだったが、ずらした話題に、彰子までもが笑い出した。

「ああ、そうだったね。お前は女遊びなんか、これっぽっちもしてやしないのだったね」

その通りだ。遊郭自体解体されているし、女遊びなどというものは、実はトンと縁がない壮太である。ただ、いかんせん本人が女性の気を惹きすぎるのだ。

壮太にその自覚が無いのだとしても。

「悪かつたよ。またぞろ、染物屋の娘さんなんかがお前に惚れでもして、騒ぎになっているのかと思つたのさ」

確かに、そういう騒ぎは日常茶飯事だ。

「俺は灯子しか口説いたことはありませんよ」

実際そうである。しかし女性というものは独占欲の強い傾向にあるらしく。

歌舞伎役者みたいに遠くから見ている分には良いのかもしれないが、壮太は只の呉服問屋の長男坊である。身近であるのがいけないのか。

「俺の意思に関係が無く騒ぎが起きるのだから、仕方がないでしょう」

むっつりと不機嫌に、壮太は芋汁を掻き込んだ。

壮太本人にも、こんなどうしようもない生活をしている自分を、何故女性が構いたがるのか分からないのだから、始末が悪い。

「もてる男は辛いね。兄さん」

そう言う次郎太も、壮太の所為で目立たないだけで、目のある女性に人気がある事は、一家の誰もが知る所だ。

「まあ、分かったよ。早々に準備をするから」

「僕も出来るだけ手伝うけれど、文吉、要るかい？」

「要るよ。確保しといて」

「分かった」

兄弟で進む会話に、両親は顔を見合わせて、後は関わらない事に決め込んだらしい。

それに気付いて、ありがたいと思いながら、壮太と次郎太の会話も、そこで途切れたのだった。

「ああ、朝から良く食べた。母さんの料理は天下一品だからねえ」
ふくよかな腹を撫で、彦衛門が茶を啜る。

「昨日も、肉入りの餅を作っていたでしょう？ 禄に寝ていないのじゃありませんか？」

心配する次男坊に、彰子はにんまりと笑う。

「大丈夫さ。今朝は風の音で目が覚めちゃったがね。昨日は、手の空いた時に下拵えして、蒸かすのは朝方台所の皆に頼んでやってもらったから」

仕事に手を抜けないのだから、体調は万全に。でも、趣味の料理もそこそこに。

彰子の計画性の良さは、拍手物だ。

「ご馳走様」

最後まで食べていた次郎田が箸を置いた時だった。

「壮太様」

部屋の方こうで、遠慮がちなおみつの声がした。

「大丈夫だよ。どうしたんだい？」

「町田屋の職人さんが来てなさいます」

早い到着に、彼の想いが伝わるようで、壮太は一つ溜息を吐く。

「わかった。俺の部屋まで、案内をしてやってくれるかい？」

「承知しました」

そう言うのと、襖の方こうの足音が小さくなって行くのが聞こえた。

「なんだ、随分と性急な職人じゃないか」

「腕が良いらしいですし、仕事も速いらしいですからね。何事も素早いのでしょ」

立ち上がりながら次郎太を見やれば、にっこりと手を振られた。

「じゃあ、お先に済みませんが」

壮太はそのまま、行き交う使用人たちの間を縫って、自室のある庭へ降りて行った。

お静と紋二郎

殊更に、ゆっくりと庭を歩いて進む。

足元には、いつの間にかやら付き添って、灯子がいる。心配そうに見上げてくる頭を撫でて安心させてやれば、ぺろりと指先を舐められた。

「艶子？」

呼びかければ、道の脇の、庭木にしている紅葉の上から、黒猫が飛び降りた。

「もう来たのね」

「それだけ、紋二郎がお静を大切にしていたってことだろう」

腕を組み、顔にはいつものうっすらとした笑顔。壮太の飄々とした風情は、こんな時でも変わらない。

「それで？ 肝心のお静は？」

丑三つ時に、壮太の部屋へ押し掛けて、自分の姿絵を頼んだ幽霊。その真意は分からないが、壮太は兎に角絵が描ける事を純粋に喜んでいた。

眠ったまま体を使われていた文吉は、あの後、壮太が使用人部屋へ連れて行き、彼の布団の中に、何も知らずに納まった。

これを本人が知ったら、卒倒してしまうかもしれない。

「朝方、彼女の力が弱まってしまいうまで描き続けたからね。文吉はちよつと疲れているかもしれないから悪いんだけど。次郎太に頼んでおいたから、もう直ぐ来る筈だよ」

「ふうん」

艶子は何だか不満そうだ。

「どうしたの？」

「だって、せっかく壮太に絵を描いてくれて言ってきたのだから、いっそ壮太の絵で縫い止めちゃえば良いのに」

今回、壮太はお静に頼まれたとおり、彼女の姿絵を描いた。彼女

を、いつものように縫い止める事も出来たがそれはしなかった。

「いやあ、でも、縫い止めたら文吉に影響があるだろうし」

「知っているわよ」

「閻魔様にも叱られるし・・・？」

それはそうなのであるが。壮太がお静を縫い止めてしまえば、くつついてしまっている文吉まで縫い止めてしまう。それで、二人を引き離せば問題はないが、取り憑かれているということは、魂がくつついてしまっているという事だ。それを無理に引き裂くとなれば、色々と弊害が出るかもしれない。

なにせ、試してみた事がない。何が起こるか分からないなら、やらない方が無難である。

「分かっているわよ」

「じゃあ？」

「あんたのそのお人好しな所と、どうでも良い事に燃やす情熱に腹が立っているだけの事よ」

別に、泣き止まないお静相手に、彼女の姿絵なぞ描く必要はなかったし、お静そのものが既にこの世の人ではないのだから、描いたところで、その絵を彼女がああ世へ持って行くとなると、せっかく描いた姿絵を、燃やしてああ世へ送ってやらねばならなくなる。

意味があるのかないのか。分からない上に、描き上がるまで、やれ何色の顔料だ、水だと壮太が動き回るものだから、丑三つの時間から艶子は寝ていないのだ。

それは灯子も一緒だが、彼女は慣れているのか、平気そうだった。

「それについては申し訳なかったよ。後でお詫びをするから」

「新しいワンピースが良いわ」

「はい。了解いたしましたよ。お嬢様」

にこりと笑う壮太に、艶子はまた不機嫌になった。

円屋の女性客ならイチコロなのだろうが、艶子はこの笑顔が嫌いだ。

「さ、着いたよ」

朝、彰子から草履を投げられた垣根を越え、入り口の門をくぐり。茶室に辿り着けば、紋二郎が縁側の前で右往左往していた。

「紋二郎さん？」

声を掛ければ、ぱっと振り向いた。

「ああ、壮太さん！」

ほっとしたような顔で、駆け寄ってくる。

「中が上がって待っていて良かったのに」

「いやあ、お恥ずかしながら茶室なんて初めてで、一体どこから上がれば良いやら」

恥ずかしそうに、短い散切り頭に巻いた手拭を取って頭を下げる。そうは言うものの、家主不在で上がり込むのは気が引けたのだらう。

壮太と違って、人好きのする笑顔をする男だ。

「今日は、何ぞお話があるとかで？」

「うん。ゆっくり話もしたいし、渡したい物もあるからね」

彼の爪や指先は、染物をしているために黒く染まっている。今日は青っぽいから、昨日は藍染めでもしていたのだろう。染料を扱う仕事柄、皮膚が染まってしまうのだ。

「正式な入り口は小さいから、家人も俺も、此処から出入りしているのさ」

いつもの通り縁側から上がろうとして、障子戸を開け、…閉めた。

「壮太さん？」

「ああ、ごめん。昨夜の大風で部屋が凄い事になっていたのを忘れていてね」

人が来るからと、昨日の夕食後、できるだけ片付けたのに、お静の訪問で全て無駄になっていた事を思い出した。

「済まないが、此処に腰を掛けてもらって良いかな」

「ああ、それは構いませんが。大丈夫ですか？」

「うん。いつもの風景に戻っただけだから」

仕方がないので、二人と二匹は縁側に座る。

「あの？」

先程から、やたらと感じる視線は、壮太と自分の間に箱を組んで丸くなる、真っ黒い猫のものだ。

瞳も毛皮も真っ黒で、鼻の先まで真っ黒の、墨のような猫。

艶やかな毛並みはとても綺麗で、黒耀の瞳は潤んで、真夜中の湖面を思わせた。

「綺麗な猫ですね」

「艶子かい？」

その名前が、この猫にはぴったりだと思った。

「さっきから俺、見られている気がするのですが」

「見詰めているからねえ」

「そうですか」

どう対応したものか、紋二郎は困り果ててしまう。

「失礼します」

一際響いた子供の声に、紋二郎も壮太も、一緒になって顔を上げた。大きな盆を持って、文吉が門をくぐって姿を見せた所だった。

「お客様にお茶をお持ちしました」

きよろきよろと、こちらを探している。少々不満そうな表情だったが、次郎太が上手く寄越してくれたらしい。

「ありがとう。こっちだよ、文吉」

手招きすると、縁側に座るこちらに気が付いて、すたすたと近づいて来る。

灯子から少し離れた縁側に盆を置き、持って来た薬缶で急須に湯を注ぎ、手際よく茶を淹れる。

茶菓子を丁寧に小さい菓子皿の上に用意して、まずは壮太の客である紋二郎の脇に置く。次に、蒸らした茶を急須から湯飲みに注ぎ、やはり、客の紋二郎を優先して、受け皿を置き、菓子皿の隣に置いた。

そうして、ようやく壮太の分を用意する。

壮太も艶子も、お互いの顔を見交わした。

予想に反して、文吉の様子に変化が見られない。

確かにそこに、お静の気配がするのに。

これは期待外れだっただろうか。

ぺこりと頭を下げて、文吉が退出しようとした時。

「ありがとう。ご苦勞様だね」

紋二郎が、文吉に声を掛けた。

「え？」

文吉は小さく呟いて、もう一度頭を下げた。と。

壮太の客の男が、驚きに満ちた表情をしながら、自分に駆け寄るのが見えた。

「え、ちょっと、君?!」

文吉は自分の体が倒れるのを自覚したが、視界が暗転して、あと何が起こったのかも分からなくなった。

紋二郎の目の前で、おそらくこの店の丁稚であろう子供が倒れ込む。

咄嗟に飛び出したが間に合わない。そう思った次の瞬間、地面に小さなその体が直撃する寸前で、壮太が支え上げた。

ほっと安心したら、力が抜けて、膝からかくりと座り込んでしまった。

「赤? いや、この色は」

臙脂?

座り込んだ直後に、ふわりと、子供の体から、見覚えのある色が翻った気がした。

「いや、でも、まさか?」

臙脂なんて色は沢山町中に溢れている。

でも、この色は。

「: お静?」

その名を呟けば、彼女の細くてやわらかくて、マメを作っていたあの手が、自分の頬に触れた。

「お静?」

姿が見えない。けれど、そこに彼女が居るのが分かる。

「お静、お静、お静！お静っ！」

何度も何度も名前を呼ぶ。

会いたかった人が、今、此処に居る。姿は見えずとも、彼女は此処に居る。

それが分かるのに、抱きしめる事もできないのか。

いや、そもそもそんなことは在り得ないではないか。彼女は既にこの世に居ない。

自分は何を勘違いしているのか。お静を想い過ぎて、頭がどうかしてしまったのかもしれない。

ああ、それでも。

ひと目で良い。

会いたい。

「お静……！」

紋二郎の頬を、暖かなものが伝った。

悔しくて悔しくて、涙が止まらない。

彼女の気配を感じたのに。現実には酷く残酷だ。

会いたい人は、もう居ない。

「まったく、煩いわね」

気付けば、黒いおかつぱ頭に黒いワンピース、黒い靴下に黒い靴。全身真っ黒な少女が、日本刀を携えて、こちらを見下ろしていた。

黒くて大きな瞳は、あの真っ黒な猫を思わせる。

「ちょっとだけよ？」

すらりと、黒い鞘から、綺羅と輝く刃を抜き。

切られる。

そう思って目を瞑ったのに、一向に痛みは襲って来ない。痛みの代わりに降り注いだのは。

「紋二郎さん、目を。目を開けて？」

聞きたかった人の声。

驚いて目を開けば、目の前に、満面の笑みを浮かべたお静の顔があった。

「ふふ。信じられない？」

お静の声だ。

紋二郎は、ゆっくりと顔を横に振る。

死んでしまった筈なのに。もう二度と、会える筈も無かったのに。その笑顔。はにかむ様な、その仕草。

紛れも無い、お静がそこに居た。

「どうしても、貴方に会いたくて」

その言葉に、どきりとした。

「お、俺だって、あんたに、どれだけ、会いたかったか！」

会って一言、言いたかった。どうしても、伝えなかった。

「すまねえ。俺が、もっと早く気持ちを伝えていたら、あんたは死なずに済んだんだろう？」

手を伸ばせば、温かみは無かったけれど。それでも触れる事ができた。

「違うの。私がもっと、皆の事を考えていたら良かったの。私が馬鹿だったのよ」

お静の死で、悲しみ、傷付いた人がいる。茜屋の主人にも、迷惑を掛けた。

先程から、お静は、笑っているのに涙を流したまま。

「私は馬鹿だったから、勝手に死んでしまったの。ごめんなさい。」

紋二郎さん。ごめんなさい」

「もういい。何も言うな」

紋二郎は、お静を引き寄せた。

「何も言うな。何も言わなくて良いんだ」

皆がお静を好いていた。お静も皆を好いていた。それだけで、彼女がどんな女性だったか、分かるだろう。

「私、貴方の事が好きなの。それだけ、どうしても伝えなかった」

そう言って、お静は更に涙を零す。

「お静、俺だって伝えたかったんだ。俺だって、俺だって、あんたが好きだ！」

紋二郎も、ぼろぼろと涙が溢れた。

「何だ。俺たち、両想いだったんじゃないか」

こくりと、お静が頷いた。

そうして、軽い、唇を合わせただけの、優しい口付け。

「ありがとう。私、幸せよ」

「俺も、お静みたいな別嬪に会えて、最高に幸せだよ」

もう一度、口付けを交わす。

二回とも、恋人というには足りない様な、触れるだけの。

それでも、二人には充分だった。

お静は目元を緩ませて、嬉しそうに笑った。

「さよなら。紋二郎さん」

「……さようなら。お静」

紋二郎の目の前で、紋二郎が贈った臙脂色のぼかしの着物が、すうっと消えた。

臙脂の後には、日本刀を構えた、黒い少女が立っていた。

「う、あれ？……うわあ！」

文吉が、壮太の腕の中で目を覚まし、自分の置かれた状況に悲鳴を上げる。

「ああ、目を覚ましたかい？」

自分の嫌っている人物が、何故自分を抱えて微笑んでいるのか。

「はははは、離して下さい！」

「うん、良いよ。俺も疲れたし」

ぱっと両手を離されて地面に落ちたが、痛いのも構わず慌てて立ち上がる。

「失礼致しました！」

必要以上に大きな声で頭を下げると、母屋へと駆けて行ってしまった。

「うん。大丈夫だったみたい」

「当たり前よ。ちゃんと離れてから切ったのだから」

ちん、と、甲高い金属音を発てて刀を鞘に納め、真っ黒な少女は紋二郎を睨んだ。

「さて。協力ありがとう。何だか壮太から、ご褒美があるらしいわよ」

「え？」

自分が呆けていた事によく気が付き、紋二郎は艶子を眺めた。そういえば、自分はこの少女の持つあの真っ黒な刀で、切られたのではなかったか。

「紋二郎さん。大丈夫かい？」

壮太に顔を覗き込まれ、紋二郎は目の焦点を合わせた。

「あ、ああ、済みません、えっと？」

今此処で、お静と会ったと思ったのだけれど。

「夢？」

ぽつりと、信じられない出来事に、あれは白昼夢でも見たのかとお静の頬を触った感触の残る両手で、お静に触れられた気がした自分の頬を挟んで、紋二郎は呟いた。

「夢じゃないよ」

その声に顔を上げれば、壮太が縁側に上がろうとしていた所だった。

「俺ね、お静さんに頼まれ事をされてね。君に渡したい物があるんだ」

そのまま障子を開けて中に入り、がさがさと何かを探している。

「あ。あったあった」

一人で呟きながら出て来ると、一枚の紙を差し出された。

「これ、は？」

「うん。君に渡してくれって」

差し出されたのは、美人画だった。

藍染めの、やはりぼかしの着物を着た女性。

「この着物・・・」

「うん。今、君が染めている着物」

お静の供養にと、紋二郎が染めているあの着物が、描かれている。その着物を着て、はにかむ様に微笑むのは。

「お静」

「うん。お静さん」

藍染めの藍は、魔除けも含み、その色は染を繰り返すほどに深く濃く、艶やかに。

「あの臙脂の着物は君が染めたんでしょ？」

「は、はい。お静に贈ったもんです」

何故、この人はお静の着ていた着物の色が臙脂だと分かるのか。藍色って、臙脂より、お静さんに似合う色だね。だから、こっちを描かせてもらったの」

不思議に思う紋二郎の横合いから、壮太が自分の絵を覗き込む。

「これ、いつ？」

「今朝方。お静さんが描けって言うから」

この着物は、確かに壮太に見せた。もう直ぐ仕上がる予定だ。

これを染め始めたのは、お静が亡くなってから。

だが、描かれた髪形は、簪までも、今さっき、自分が見たお静のそのまま。

「俺ね。あんまり信じてくれる人がいないのだけれど、見えるの」

さらりと言った壮太は、にこにここと笑ったままだ。

「ありがとうございます」

聞きたい事は山ほどあったが、自然に感謝の言葉が出た。

「お礼を言われるような事は、していないよ」

仕事をこなしたただけだから、と言って、壮太が、へらりと笑った。「さ。せっかくうちの丁稚が持ってきてくれたのだから、食べて行かないかい？」

見れば、お茶とお茶菓子が縁側に並んでいる。

「あ。やられた」

壮太の分が、すっかり綺麗に無くなって、湯飲みも皿も空っぽだった。

「艶子め」

艶子とは、あの黒猫の名前ではなかったか。猫が、お茶と菓子を飲み食いするのだろうか。

「仕方ない。まあ、俺は朝食がいつもより多かったので、気にせずどうぞ」

ぽん、と縁側に座って、壮太がぺたぺたと自分の横の床を叩く。

あとは紋二郎が座るのを待つでもなく、自分の分のお茶を、やかんに残っていたお湯で淹れている。

そういえば、あの真っ黒な少女はどこへ行った？

わん

白い犬が、足元で吠えた。

「ああ、今、行きます」

紋二郎はまだ自分が座っていなかった事に気が付いて、足を進めるのだが。

何だか、現実味がなくて、ふわふわと浮いているようで、地に足が着いていないような感覚がある。

そんな紋二郎を見て、壮太がぽりぽりと、申し訳無さそうに頭を掻いた。

「あー、当てられちゃったか。灯子」
がう！

「あいた！」

白い犬が、紋二郎の足を齧った。

「戻った？」

痛みに驚けば、確かに、ようやくと足が地面を踏んだような気がした。

「時々、当てられちゃって魂が半分体から出ちゃう人がいるからね」

「え？魂？」

何の事だか。

「灯子にお願いして、君のふわふわ感を取ってもらったの」

壮太の簡単な説明に、そういう事かと納得する。

先程、なんだか感覚がおかしかったのに、痛みで元に戻った。

「済みません」

「誤る事じゃないよ。ほら、食べて食べて」

大人しく壮太の隣に座り、好意に甘える事にする。お茶菓子は、朝である事も配慮したのだろう。醤油焼き煎餅だった。

隣でにこにこ笑顔を絶やさない壮太と、他愛無い会話を交わしながら、本当に不思議な人物だと、紋二郎は思った。

彼の、この世ならぬ者が見えるという体質も、渡された美人画も。この、飄々とした風情も。

「今日は、本当にありがとうございました」

「だから、お礼を言われる事は何もしていないから」

もう一度礼を言っても、同じ様に返されて、紋二郎はくすくすと笑った。

「俺、頑張って一人前になります」

「おう。頑張れ」

「また、お邪魔しても良いですか？」

「いつでも」

女性達が、彼の周りに集まる理由が、なんとなくが分かった気がする。これは、本当に男という生き物が鈍過ぎるのか、女性という生き物が鋭過ぎるのか。

一見何を考えているか分からない様で、彼の傍は、なんとも心地が良い。

「ありがとうございました」

「だから、何もしてないってば」

何度も礼を言って、何度も同じやり取りをして、紋二郎は店へと帰って行った。

胸にしっかりと、お静の姿絵を抱えて。

逢 愛 藍

「どうだった？」

ひと段落着いて、灯子と一緒に縁側で伸びていれば、艶子が戻って来た。

体を起こして、壮太は黒猫を迎え入れる。

「無事に終了したわ」

「それは良かった」

すとな、と、膝の上に身軽に飛び移る艶子の頭を撫でてやる。

ちゃんと三途の川まで、無事にお静の魂を送って行けたらしい。

「意外に艶子さん、恋愛に夢があたりで？」

「さて？何のことかしら」

こちらを見もせずに、黒猫は壮太の膝の上で、箱を組んで丸くなる。

紋二郎をこの茶室に呼んで、文吉と引き合わせたものの、文吉に取り憑いたお静の反応が無いので、一瞬失敗してしまったかと思った艶子だったのだが。

結局、帰ろうとした文吉に、紋二郎が声をかけた事により、紋二郎の声に堪えきれなくなったお静が、文吉から離れて飛び出した。

その時に、彼女の未練を死神の刀ですっぱり断ち切って、さっさと連れて行くことが出来たのに、艶子は二人に時間を与えた。軽くではあったものの、彼女の力で見えないはずのお静を、紋二郎にも見ることが出来るようにして。

ふう、と、鼻から息を吹き出して、艶子はことな、と顎を壮太の膝の上に落とす。

「だって、お静が容姿のことで死んでしまっただなんて、そんな死に方で終わるのが嫌だったのよね」

外見より中身とも言いが、ある程度、人の容姿に、その人の内面は影響する。それでも、生まれ持った容姿はどうしようもない。

容姿を気にしていたからこそ、一生懸命自分を磨き、綺麗にして、顔に関係なく誰からも好かれたお静は、健気で可愛らしく、同姓の艶子から見ても性格も気立ても良い娘だった。できれば、生きているうちに彼女と出会いたかったと思えるほどに。

そのお静が、そんなくだらない理由で命を絶ってしまったのが、艶子は悔しかった。

なら、一生懸命に生きた彼女が、せめて自分で未練を断ち切ってしまえるように。

好いた相手との短い逢瀬くらい、仕事に影響があるわけでなし。閻魔も許してくれるだろう。

「彼女は？」

壮太が、今度は背中を撫で始める。

「大丈夫よ。あんたに、お礼を言ってくれて」

壮太の暖かな手のひらが、自分の背を行き来するのが気持ち良くて、艶子は目を閉じながら答えた。

「俺何もしていないけどなあ？」

「姿絵、嬉しかったらしいわよ」

「それは結構」

壮太の声が、なんとなく嬉しそうなのは、気のせいではないだろう。

のんびりとした時間が過ぎて行く。

「紋二郎は？」

あの、優しい娘が愛した青年は、彼女との再会を、どう捉えているのだろうか。

「うん。ちょっと当てられて浮いちゃっていたから、灯子に頼んで戻してもらった」

「そう。灯子は狛犬だからねえ。いつも面倒をかけるわね」

素直でない艶子に、壮太はくすりと笑う。

「本人に言ってあげなよ」

「そこに居るもの」

灯子も、気にしていないのか。壮太の隣で寝たふりを決め込んで
いるらしい。ぴくりと耳が動いただけだった。

お互いがお互いだけに、素直になれない灯子と艶子に、壮太も
それ以上は触れない事にする。

どうしたって、死神と狛犬は相容れない。

「彼、一人前の職人になるってさ」

紋二郎が、帰り際に告げた言葉は、誓いに等しく。

触れ合っただけで、お静の魂に触発されてしまったのは、彼の魂
そのものが、お静と共にあろうとしたからだ。

その彼が、お静の死を彼の中で昇華するのに、時間はかかるのか
もしれないが。

「じゃあ、大事な取引先になるわね」

「父さんと次郎太に言っておかないとね」

お静の生きた証を、紋二郎が受け止めていけるならそれで良い。

お静に頼まれて描いた似姿は、誇らしく笑っているのだから。

「彼はきつと、素晴らしい職人になるよ」

「そうね」

日差しが暖かく、ぽかぽかとして縁側は気持ち良かった。

お静の四十九日もとうに過ぎ。季節は盆を迎えた頃。

壮太はなんとなくだったが、あの枝垂桜の元を訪れた。

あの日、蕾だけだった枝垂桜は、彼女の四十九日には満開の花を
咲かせ、それは見事だった。

今はその花も無く、来年に向けて葉を赤く染め始めている。春に
はまた、見事な花を咲かせるのだろう。

ぼうつと、桜を見てみるが、春先のあの時のように、寂しそうに
佇む女の姿は無く。

代わりに、花を手向ける藍染めの着物の男が一人。

その男に寄り添って、見事な藍のぼかしの着物を、粋に着こなし
た女性が、楽しそうに桜を見上げていたのを見たのは、壮太だけだ

った事だろう。

逢 愛 藍（後書き）

これにて円屋は終わりになります。

最後まで読んでいただいた方、本当に根気良くお付き合い下さりありがとうございます。

初めての和風モノで、作風も少し変えているので毎回緊張して書き進めてまいりました。ここまで来るのが本当に長かったように思います。

少しでも楽しんで読んでいただけていたら嬉しいです。
よろしければご感想をお聞かせ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855g/>

幽霊案内人 円屋壮太

2010年10月8日14時59分発行